

The background of the entire page is a photograph of several palm trees silhouetted against a vibrant sunset sky. The sky transitions from a deep blue at the top to a bright orange and yellow near the horizon, where the sun has set. The palm trees are of varying heights and are scattered across the frame, with some leaning slightly. The overall mood is serene and tropical.

JAPAN APIC

Since 1975

一般財団法人
国際協力推進協会 会報

No.017

January 2024

CONTENTS

01 ごあいさつ

カリブ事業

カリブ諸国・リーダー招待計画

03 バルバドス国民エンパワーメント・高齢者問題大臣招待計画

07 トリニダード・トバゴごみ処理研修

09 ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援

10 トリニダード・トバゴでの日本語スピーチコンテスト開催支援（2023 年度）

太平洋事業

太平洋諸国・リーダー招待計画

ミクロネシア三か国若手リーダー招待計画

太平洋・カリブ事業

13 太平洋・カリブ学生招待計画 2023

17 太平洋・カリブ記者招待計画 2023

留学生支援事業

19 「西インド諸島大学（UWI）大学院生留学制度」を新設

20 第 8 期ザビエル留学生在上智大学に入学

21 第 5 期 APIC-MCT 留学生在上智大学大学院を卒業／卒業生へのインタビュー

23 第 7 期 APIC-MCT 留学生在上智大学大学院に入学 「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

講演会事業

24 APIC 早朝国際情勢講演会

25 第 11 回「ハイチ便り」（最終回）：ハイチの文化

～食材や食文化について～

寄稿：八田 善明 在ハイチ日本国大使（当時）

29 「バルバドス 歴史の散歩道」（その 3）

第 2 部 イギリス人の植民地ビジネス

寄稿：品田 光彦 前 駐バルバドス日本国大使

33 令和 4 年度（2022 年度）事業報告書

34 APIC 役員名簿

No.017

January 2024

いあつち

新年おめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年世界は、残念ながら一層困難な年となりました。ロシアのウクライナ侵攻による戦争は、夏頃にはウクライナの反転攻勢を通じて解決に向けて動くのではないかとの見方もありましたが、情勢は膠着、冬季が到来しました。更に、10月には中東でガザのハマスがイスラエルを奇襲、イスラエルは残虐な攻撃に激しく反撃、この執筆の時点では双方の間で今なお激しい戦闘が続いています。長年の紛争とは言え、メディアで見る人的犠牲には胸が締め付けられます。今年が、当事者や国際社会の努力により解決に向けて動く年になって欲しいと願わずにはおれません。

他方、新型コロナは抑制され、我々の生活も漸く日常を少し取り戻すことができた年になりました。当協会も、昨年は海外との活動を再開させることができました。

4月には西インド諸島大学ケープヒル校のランデイス学長を招待、11

月にはバルバドスのハンフリー国民エンパワーメント・高齢者問題大臣を日本に招待しました。6月には、トリニダード・トバゴのごみ処理視察団4名が来日しました。7月には、太平洋島嶼国から3名、カリブ

諸国から5名の大学生を受け入れ、これらの大学生は上智大学で約3週間の夏季集中特別授業に参加しました。また10月には、ソロモン諸島等太平洋島嶼国・地域から4名、カリブのトリニダード・トバゴから1名の記者団が約10日間訪日、鹿児島県を訪問、環境・防災・観光関連施設を視察しました。更に一部オンライン授業などを余儀なくされていた留学生事業についても、9月にはミクロネシアのザビエル高校卒業生2名が来日、上智大学に入学、4年間の学部生活を始めました。またMCT（ミクロネシア環境保全基金）修士留學生は、9月に2名が卒業、新たに1名が上智大学に入学しました。9月には新たに始めた西インド諸島大学から最初の修士留學生1名

が来日しました。その他、外務省幹部等による講演会活動等も引き続き行うことができました。これらの事業は、以下本号でも詳細を御報告しておりますので、ご覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、これら事業は多くの方々のご支援とご協力により初めて実現可能となったものです。また実際の実施に当たっては、視察を温かく受けて入れて頂くなど、多くの方々から御協力を頂きました。茲に厚くお礼を申し上げます。

2024年1月

一般財団法人国際協力推進協会（APIC）

理事長

重家 俊範



APIC の主な動き [2023 年 6 月～ 12 月]

6月 第 396 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務省経済局参事官 大河内 昭博 氏）

ジャマイカでの日本語スピーチコンテスト開催支援

トリニダード・トバゴごみ処理研修

7月 太平洋・カリブ学生招待計画 2023

第 397 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務省国際協力局長 遠藤 和也 氏）

ミクロネシア三か国若手リーダー招待計画

9月 第 398 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務省南部アジア部長 中村 亮 氏）

第 5 期 APIC-MCT 留学生在上智大学大学院を卒業

第 8 期ザビエル留学生、第 7 期 APIC-MCT 留学生、
第 1 期 UWI 留学生在上智大学／大学院に入学

10月 第 399 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務省地球規模課題審議官 赤堀 毅 氏）

太平洋・カリブ記者招待計画 2023

11月 バルバドス国民エンパワーメント・高齢者問題大臣招待計画

第 400 回早朝国際情勢講演会
（講師：東京大学 教授／ JICA 緒方貞子平和開発研究所 シニア・リサーチ・アドバイザー（前所長） 高原 明生 氏）

トリニダード・トバゴでの日本語スピーチコンテスト開催支援

12月 第 401 回早朝国際情勢講演会
（講師：外務省欧州局長 中込 正志 氏）

今号の表紙写真



ハワイ モロカイ島

撮影者：フロイド・K・タケウチ
Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos



バルバドスから「ブルーゾーン」へ — 大臣、日本の福祉と長寿を見聞 —

鈴木信「沖縄ブルーゾーンの会」会長（琉球大学名誉教授）（右から3番目）と

カリブ諸国・リーダー招待計画 バルバドス国民エンパワメント・高齢者 問題大臣招待計画

APICは、2023年11月5日から13日まで、バルバドスからカーク・ハンフリー国民エンパワメント・高齢者問題大臣を訪日招待しました。大臣には、国民エンパワメント・高齢者問題省のジェフ・ウィルシャー事務次官、コリン・ワルコット国家高齢者支援委員会局長、及び、デボラ・ノーヴィル福祉局長とNGOであるバルバドス退職者組合のマリン・ライスボーエン会長の計4名が同行しました。

バルバドスは日本と同様、少子高齢化の問題を抱えており、国民エンパワメント・高齢者問題省は、人的、財政的、技術的資源を最大限に活用し、バルバドスの全体的な社会経済発展と社会の構成員すべてのエンパワメントに貢献すること等を使命とし、バルバドスの貧しい人々、弱い立場にある人々、及び、疎外されている人々に活力を与えること、並びに、同国内外の



バルバドスについて

中米カリブ海の島国。1966年に英国から独立。2021年に共和制に移行。

面積：約430km²（種子島とほぼ同じ）
人口：28.1万人（2023年、世銀）
民族：アフリカ系が約9割
言語：英語（公用語）
宗教：キリスト教、他
1人当たりGNI：19,350ドル（2022年、世銀）

戦略的パートナーと協力して効果的かつ効率的な社会的保護を提供すること等を任務としています。このような状況の下、福嶋香代子駐バルバドス日本大使による提案及び在バルバドス日本大使館を通じた調整を踏まえ、APICとしてハンフリー国民エンパワメント・高齢者問題大臣を招待することとしたものです。

ハンフリー大臣は、堀井巖外務副大臣及び宮崎正久厚生労働副大臣と会談し、厚生労働省で高齢者福祉政策等について、国立社会保障・人口問題研究所で介護基盤・介護者支援、及び、超長寿社会等の研究・分析について、東京都福祉局で都のホームレス対策について説明を受けました。また、国立障害者リハビリテーションセンター、港区立男女平等参画センター（リーブラ）、及び、葛飾区シルバー人材センターとその作業所を視察しました。

各会談、説明、視察にはAPICから側嶋常務理事代行と荒木事務局長が交代で同行しました。

6日午前中、APIC側から大臣一行に対し、日程について説明するとともに、重家APIC理事長は現在日本が直面している社会保障、経済、及び国際関係



APICによるブリーフィング

午後、一行は厚生労働省を訪問し、日本の高齢者福祉政策（介護保険制度、地域包括ケアシステム、認知症対策、介護ロボットの活用、医療と介護の問題等）、及び、障害者福祉政策について説明を受けました。

続いて、国立社会保障・人口問題研究所を訪問し、同研究所で行っている「一億総活躍社会」に向けた中高年の活躍を支える介護基盤と介護者支援の研究、及び、超長寿社会における人口・経済・社会のモデリングと総合分析について説明を受けました。

7日午前中、一行は所沢市の国立障害者リハビリテーションセンターを訪問し、同センターの活動状況に関する英語のビデオ（日本における障害者の種類、それぞれへの対応状況、国際協力等についての説明）を観た後に、芳賀総長から質問に対する回答を得て、同センターのリハビリ施設を視察しました。ハンフリー大臣は、同センターは素晴らしい活動をしているので同センターから学びたいと述べ、追って観たビデオのリンクを入手しました。

一行は、午後、港区立男女平等参画センターを訪問し、同センターが港区男女平等参画条例に基づき、男女平

等、健康、人権尊重、等に取り組んでいることについて説明を受けました。

夕刻、ハンフリー大臣は堀井巖外務副大臣と会談しました。



堀井外務副大臣との会談

ハンフリー大臣は、バルバドスも日本と同様、少子高齢化問題を抱えており、日本の取組に学ぶために訪日したが、有益な訪問が進行中である旨、バルバドスは日本から海洋環境関連を含め支援を受けており感謝している旨、述べ、堀井副大臣は、2024年は「日・カリコム交流年」であり、両国間の交流を更に強化していきたい旨述べ、和やかな会談となりました。

名古屋を訪問

8日午前中は、名古屋市立大学医学部を訪問し、高齢者地域医療・地域医療教育、発達障害の医療と教育について、「うまみ成分が攻撃性を抑える効果があることについてマウスを使った実験により検証した結果の報告」、「介護にかかわるリカレント教育プログラ

滞在中の主なスケジュール

11/5（日）	来日
11/6（月）	APICによるブリーフィング APIC主催昼食会 厚生労働省訪問 国立社会保障・人口問題研究所訪問
11/7（火）	国立障害者リハビリテーションセンター訪問 港区立男女平等参画センター（リーブラ）訪問 堀井外務副大臣と会談
11/8（水）	名古屋市へ移動 名古屋市立大学医学部、名古屋市障害者スポーツセンター、名古屋市身体障害者福祉連合会訪問 東京へ移動
11/9（木）	山形県南陽市へ移動 白岩南陽市長と会談 同市各施設を訪問 東京へ移動
11/10（金）	東京都庁福祉局訪問 葛飾区シルバー人材センター訪問 宮崎厚生労働副大臣と会談 重家APIC理事長主催歓迎夕食会
11/11（土）	沖縄へ移動 「沖縄ブルーゾーンの会」例会出席
11/12（日）	沖縄空手会館訪問 市内視察
11/13（月）	池田沖縄県副知事と会談 離日

ムの紹介」、「高齢化が進む中で、ウエイトなど足首に負荷をかけた歩行が歩行障害の予防につながること」、「名古屋市立大学の授業の一環として医学・看護などの学生がコミュニティでハンズオンの実習を組み込んでいること」、及び「認知症の研究の概要」についてのプレゼンテーションを含め、説明を受けました。

ハンフリー大臣からは、有益な情報を得ることができた旨、バルバドスの学生を送って学ばせたい旨の発言もありました。

同日午後は、名古屋市障害者スポーツセンターを訪問しました。同センターは、大阪にある同種のセンターに次いで2番目に古いもので、パラリンピックの車いすバスケットとアーチェリーのコーチ2名から施設の概要について説明を受け、施設内を案内してもらいました。その後、ブライインド（盲目を想定してアイマスク）の卓球、車いすのバスケットを大臣一行も体験しました。また、一行一人一人の名前を点字で作成したシールをプレゼントされ、一行全員、スマホに貼っていました。大臣は、この施設は非常に充実している旨、二人のコーチに是非バルバドスに来て指導してもらいたい旨、述べ

べていました。

その後、社会福祉法人名古屋市身体障害者福祉連合会を訪問し、併設された施設を視察しました。この施設は、元々は障害者によって設立された法人ですが、今は障害者自らの資金に加えて名古屋市からも補助金が出ているとのこと。ここでは、障害のある人が30名以上働いており、自動車部品の磨きや縫製など、それぞれ作業をしている部屋を訪問した際に、障害者の方々は、大臣一行をバルバドスの旗を振って迎えました。全員の人がパソコンで作業している様子を見た大臣は、資料を音声で聞き取っていると知り関心を示していました。

大臣が、先ほどもらった点字のシールを全員の手に差し出して、何と書いてあるか聞くと、「はんふりー」と発声し、大臣始め一行は歓声を上げました。

南陽市を訪問

9日、一行は一日かけて東京2020オリンピック・パラリンピックに際しバルバドスのホストタウンだった山形県南陽市を訪問し、大歓迎を受けました。午前11時頃、大臣一行が南陽市市庁舎



名古屋市障害者スポーツセンターにて車いすバスケットを体験



南陽市市庁舎にて、拍手で出迎え

に到着すると、建物の外に大きなバルバドス国旗が掲げられており、お迎えに出ていた白岩孝夫市長の先導により大臣一行が建物の中に入ると、多くの職員が大きな拍手で歓迎し、現地メディアもその様子を撮影していました。

最初の大臣・市長会談では、市長がバルバドスを訪問したことの紹介、一行の訪日日程、バルバドス・南陽市間で引き続き交流を進めていくこと等が話され、昼食会で改めて両者が親しく懇談しました。

市庁舎での会談後、一行は、ギネスで世界一大きい木造のコンサートホールと認定された「シエルターなんようホール」を視察し、商工観光課から、南陽市の障害者対応や観光促進の取組について説明を受け、障害者対応もなされている多目的市民体育館を視察しました。

夜には、重家APIC理事長主催夕食会が開催されました。一行の訪問先やバルバドス及び中米の関係者等も交えた



宮崎厚生労働副大臣との会談

会合において、ハンフリー大臣は、東京、名古屋市、南陽市の訪問を終えた時点での感想や沖縄訪問への期待も披露し、和やかな懇談が行われました。

沖縄を訪問

「ブルーゾーン」と称される世界5大長寿地域（イタリアのサルデーニャ島、米国カリフォルニア州のローマリンダ、コスタリカのニコヤ半島、ギリシャのイカリア、及び沖縄）の一つとして名高い沖縄への訪問は、バルバドスのモトリー首相からハンフリー大臣に是非とも訪問するようにと示唆があったことを受けたものだというものでした。同大臣は同首相の勧めで、Netflixで配信されているドキュメンタリーシリーズ「100まで生きる：ブルーゾーンと健康長寿の秘訣（“Live to 100: Secrets of the Blue Zones”）」の

一行は、市長との昼食後、急遽、地元ワインを売っているお店を訪問し、買い物をしました。

その後、児童福祉施設「まなびのへやバンビーナ南陽」を視察し、同施設の活動について説明を受けました。

それから一行は、熊野大社を訪問し、参拝の仕方を習って、各自、賽銭を入れ、それぞれ祈願をしていました。その後、夕鶴の里資料館を訪問し、鶴の恩返しの語りを聞いた後、館長の案内で同資料館内を視察しました。それから、公衆浴場「赤湯温泉湯こつと」でバリアフリーの浴室等を視察しました。

赤湯駅到着から同駅出発まで、ずっと市の担当者に同行していただきました。バルバドスと南陽市との友好関係は続くことでしょう。

一行は10日午前、東京都福祉局を訪問し、都のホームレス対策について説明を受けました。都会特有の問題であるホームレスの問題について、東京都は、年2回概数調査を、5年に1回生活実態に関する聞き取り調査を、実施しているところ、都においてホームレスの人数は減少してきていること、自立支援センターを設置し、ホームレスの人々の就労支援を行っていること等の説明があったのに対し、ハンフリー

的な関わりなど、長寿の秘訣について聞きました。

13日午前、沖縄県庁で池田竹州副知事と会談しました。副知事との会談では、「かりゆしウエア」や空手も話題となり、ハンフリー大臣が自分も同行者も「かりゆしウエア」を多数着購入したこと、大臣自身、空手で瓦を割ったことを紹介するなど和やかな雰囲気で行われ、双方から、今後もバルバドスと沖縄との関係継続の意向が示されました。その後、県庁担当職員から沖縄県における高齢者問題への取組について説明を受けましたが、大臣は、後日ビデオ会議で、実務面での追加情報の提供を要請しました。

ハンフリーバルバドス国民エンパワーメント・高齢者問題大臣一行は、このように日本の各地で少子高齢化の中での日本の対応状況を見聞し、多くの材料を持ち帰りました。バルバドスにおける少子高齢化に対する今後の対応が注目されます。



公民館にて高齢者との交流

トリニダード・トバゴごみ処理研修

2023年6月25日～7月2日、APICは「トリニダード・トバゴごみ処理研修」を実施しました。トリニダード・トバゴ共和国の公益事業省から経済調査・政策・企画局局長のアーリー・コリス氏、研究アナリスト・固形廃棄物部門主任のアイーシャ・ネルソン氏、トリニダード・トバゴごみ処理事業社から廃棄物システムエンジニアのケビン・ミッチェル氏、物質回収施設監督のケンダル・コリス氏が参加しました。

トリニダード・トバゴは、廃棄物処理の問題、特に埋め立て処分場の残余年数が逼迫する課題を抱えており、日本におけるごみ処理について視察・研修を行いました。都内では都の焼却施設及び、食料廃棄物の飼料化を行っている民間企業の視察、大崎町（鹿児島）では大崎町とSDGs推進協議会の協力の下、リサイクル日本一の廃棄物処理とリサイクルのプロセスについての成功事例の視察を行いました。本計画は2019年に実施予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で延期され、



大崎町長表敬訪問

城南島第二飼料化センターの視察を行いました。この会社は事業者から出る食料廃棄物を回収して飼料に変換し販売する会社で、こちらもごみから電気・製品を生み出す、また飼料製造過程においても一切ごみが発生せずセメントなどにリサイクルされるシステムについて興味を持っていました。

翌27日には大崎町に移動し、最終処分場を視察しました。トリニダード・トバゴでは廃棄物が7m以上に積み重なっているという現状があり、埋め立て処分場内の廃棄物の少なさ、臭いやハエの少なさに驚き、「夢のようだ」と感嘆も声が上がりました。その後、民家を訪問し家庭での分別の様子を見学しました。大崎町では27品目の分別

を行っており、その細かい分別方法や住民主体のごみの管理・収集方法に驚いていました。その後、大崎町リサイクルシステムについての座学や質疑応答が行われ、一日の視察を通じた感想や自国の課題を反映した疑問や質問が多く上がりました。

28日は大崎町役場で東靖弘町長への表敬訪問を行い、盛大な歓迎を受けました。その後、そおりサイクルセンター・松山有機工場視察を行い生ごみの堆肥化作業を体験し、実際の仕組みについて学びました。

29日は大崎中学校で、日本の給食を体験し、生徒と一緒に飲み終えた牛乳パックを洗って開き、乾かす工程を体験しました。学校でも27品目の分別が

この度無事に実施されました。また、大崎町の視察にはこのプロジェクトの提案者である平山達夫前トリニダード・トバゴ大使も同行しました。

6月26日は午前中にプログラムのオリエンテーションを行いました。コリス氏は公益事業省の立場から、「この訪問によって、

私たちは政策側の観点から、持続可能なリサイクルと再利用のための有益で効果的な取り組みを実施するための方針として活用できるような情報を得ることを期待しています。私たちはここに来ることを本当に楽しみにしており、学んだ教訓を持ち帰りたい。」と述べました。午後は、練馬区にある光が丘清掃工場を視察しました。都のごみ回収の現状について学び、回収時の分別方法や、収集費用を誰が負担しているか、焼却による発電システム等について興味を持っていて、多くの質問が出ました。その後、株式会社アルフォ

滞在中の主なスケジュール

6/25 (日)	来日
6/26 (月)	光が丘清掃工場 見学 株式会社アルフォ城南島飼料化センター 見学
6/27 (火)	鹿児島へ移動 埋立地と浸出水処理施設 視察 家庭でのごみ分別の様子見学 大崎町のリサイクルシステムに関する講義
6/28 (水)	大崎町長表敬 訪問 そおりサイクルセンター 見学 松山有機工場 視察
6/29 (木)	生ごみの寄せ作業見学・体験 ジャパンアスリートトレーニングセンター大隅 視察 大崎中学校 訪問（学校でのごみ分別の視察） アクションプランの議論と計画立案
6/30 (金)	東京へ移動 東京観光（渋谷・表参道・原宿） 重家俊範 APIC 理事長主催 歓迎夕食会
7/1 (土)	浅草観光、日本文化体験
7/2 (日)	東京臨海広域防災公園 見学 離日



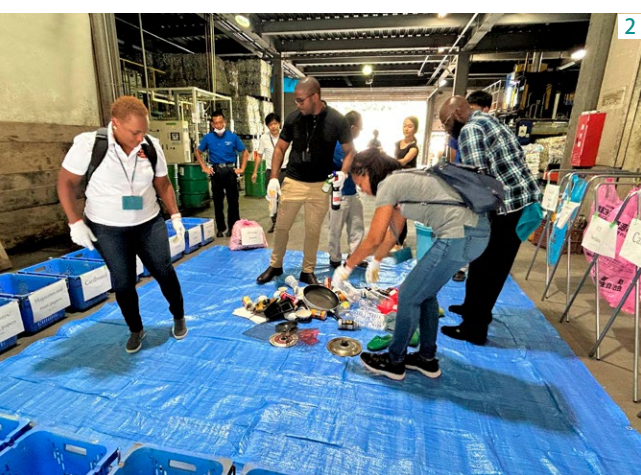
光が丘清掃工場の視察



重家 APIC 理事長主催夕食会

術面や法整備について具体的なアドバイスがありました。

3日間の大崎町での研修を終え、東京へ移動し都内観光を楽しみ、夕方には重家APIC理事長主催の夕食会が開催されました。各参加者から、今回の滞在中の感想と成果について報告があり、住民主体で大崎町がごみ処理に取り組んでいること、また最終処分場の綺麗さにはとても驚いたこと、帰国後は政策側・実施機関側それぞれ協力し今回視察した内容について実践していきたいという発表がありました。



1. 最終処分場視察
2. そおりサイクルセンターにて27品目分別体験
3. 牛乳パック洗浄・分別体験（大崎中学校）

ジャマイカでの 日本語スピーチコンテスト開催支援



上：渥美在ジャマイカ大使（右端）と参加者／下：会場の様子
（写真提供：在ジャマイカ日本国大使館）

2023年6月17日に、在ジャマイカ日本国大使館・西インド諸島大学（UWI）モナ校の共催で日本語スピーチコンテスト2023が実施されました。本コンテストは国際交流基金、JICA、ジャマイカ日本語教師会の協力のもと行われ、APICは協賛という形で支援を行いました。当日は渥美恭弘在ジャマイカ日本大使、ウィリアムズ教育・青年大臣が出席したほか、60名ほどの観客が訪れました。

10名の参加者は日頃の日本語学習の成果を発表し、「私の好きなもの」（レベル1）と「環境と私」（レベル2）についてスピーチを行いました。コンテストの最後には成績発表が行われ、優勝者は表彰されました。APICはコンテストの賞品として、日本語の本や日本文化に親しんでもらえるグッズを送りました。現地ではなかなか手に入らないものばかりだったようので、参加者たちはとても喜んでいました。

西インド諸島大学 University of the West Indies (UWI)

西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。4つのキャンパス（ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケープヒル校、アンティグア・バーブーダのファイブアイランズ校）の他、通信制のオープンキャンパスが各地にあり、英語を公用語とするカリブ諸国における最古にして最大の高等教育機関として、様々な分野に人材を輩出している。

トリニダード・トバゴでの 日本語スピーチコンテスト開催支援（2023年度）



コンテストに参加した7名



左：同列2位となった学生たち／右：優勝した学生
（写真提供：在トリニダード・トバゴ日本国大使館）

2023年11月17日に、トリニダード・トバゴにある西インド諸島大学（UWI）セント・オーガスティン校言語学習センター（Centre for Language Learning：CLL）にて、第6回日本語スピーチコンテストが開催されました。

本コンテストは、在トリニダード・トバゴ日本国大使館およびCLLが共催し、国際交流基金、カリビアンガス化学社（Caribbean Gas Chemical Limited：CGCL）、APICが支援という形で実施されました。

本年度の参加者は7名で、全員初級レベルに出場し発表を行いました。スピーチのテーマは、トリニダード・トバゴあるいはカリブ地域における観光、エネルギー、環境の中からどれかについて選び、それぞれパワーポ

本コンテストは、在トリニダード・トバゴ日本国大使館およびCLLが共催し、国際交流基金、カリビアンガス化学社（Caribbean Gas Chemical Limited：CGCL）、APICが支援という形で実施されました。

本年度のコンテストでも引き続き、現地の日本語や日本文化に対する関心の高さが伺えました。また、今回の出場者数は前回の倍以上ということで、今後ますます活気のあるコンテストになっていくことが期待されます。

太平洋諸国・リーダー招待計画

ミクロネシア三か国若手リーダー招待計画

2023年7月31日から8月8日の日程で、「ミクロネシア三か国若手リーダー招待計画」を実施しました。今般招待したのは、パラオ共和国の人的資源・文化・観光・観光省よりレイモンド・オーガスト氏、ミクロネシア連邦のSteady Palms（同地域のIT・再生可能エネルギー関連サービスを提供する企業）よりヨウタ・オウエ氏、マーシャル諸島共和国の海洋資源局海洋資源局保護地域ネットワークオフィスよりブラyant・ゼベディ氏の3名です。

3年越しの実施

本計画は当初2020年に実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となり、この度、3年越しに実施が可能となりました。

本プログラムは、参加者の関連する分野において、東京及び地方での視察や意見交換、ブリーフィングを通して日本での取り組みを学ぶことで参加者の母国への発展に寄与する一助となることを目的としています。今回招待し

たヨウタ・オウエ氏はエネルギーやインフラ整備分野、ブラyant・ゼベディ氏は海洋保護分野、レイモンド・オーガスト氏は人材開発分野に関わる職務に就いているため、日本滞在中はその分野に関わる団体や省庁を訪問しました。また、東京や広島での観光や防災学習体験を組み込む等、日本の社会や取り組みに関して学びを深める機会も設けています。

東京での視察・訪問

7月31日は午前中にまずAPIC事務所にてプログラムの詳細の説明を行いました。参加者3名からは「日本での取り組みを学び、母国に活用できるものは取り込みたい」とのコメントがありました。その後、APICが支援しているザビエル留学生とMCT留学生と面会しました。参加者3名ともAPICの奨学金プログラムについては来日前から知っており、学生たちへ研究内容や専攻等に関して質問していました。特に今年9月に卒業したナター

シャさんとシャナイアさんは、オウエ氏と同時にザビエル高校（ミクロネシア連邦）に在籍しており、専攻もオウエ氏の職務内容に関係していることから、帰国後に仕事で連携したいという話もあり、両者にとって良い交流の場となったようです。

午後には3名それぞれの出身国の大使館を訪問し、大使館の役割や大使自身の経験などを聞く貴重な機会となりました。夕方には重家APIC理事長主催の歓迎夕食会が開催され、プログラム中の訪問先や大洋州の関係者が集い、3名の来日を歓迎しました。

8月1日午前は日本工営株式会社を訪問し、海外におけるインフラ関係のプロジェクトについて説明がありまし

た。午後には防災体験学習施設「そなエリア東京」と東京スカイツリーを訪問しました。そなエリア東京の訪問では3名とも「災害発生時の対応に関して良い勉強の機会となった」と感想を述べました。

翌2日は南洋貿易株式会社を訪問し、同社で扱っている日用品や車等についての説明がありました。最近では冷凍食品の取り扱いも始め、現在はマーシャル諸島に冷凍の和牛を輸出しているということで参加者からは歓喜の声が上がりました。他にも、太平洋で行われているエネルギー関係のプロジェクトについて説明がありました。ミクロネシア地域でのエネルギー不足は深刻な問題となっており、停電など

滞在中の主なスケジュール	
7/30（日）	来日
7/31（月）	APIC 事務所にブリーフィング 駐日パラオ・ミクロネシア連邦・マーシャル諸島大使館 表敬訪問 重家俊範 APIC 理事長主催 歓迎夕食会
8/1（火）	日本工営株式会社、そなエリア東京 訪問
8/2（水）	南洋貿易株式会社、JICA 訪問
8/3（木）	環境省、エネルギー庁、厚生労働省によるブリーフィング
8/4（金）	東京外国人材採用ナビセンター 訪問
8/5（土）	広島へ移動 広島平和記念資料館、原爆ドーム等 視察
8/6（日）	宮島観光
8/7（月）	岡山へ移動 日生町漁業協同組合 訪問
8/8（火）	離日

で人々の生活に影響を及ぼしています。参加者から様々な質問があり、高い関心があることがうかがえました。その後のJICAでのブリーフィングでは堰水尾 東南アジア第六・大洋州課課長よりJICAのミッション、大洋州における協力事業の規模等の概要、JICAの奨学金で日本に来る学生たち等に関して説明がありました。



1. 駐日パラオ共和国大使館にて、アデルバイ大使（左から2 番目）と 2. ザビエル留学生・MCT 留学生との面会
3. 日本工営株式会社を訪問 4. 南洋貿易株式会社を訪問

3日の環境省への訪問では、日本の海洋保護政策をテーマに、環境省の役割、他省との連携及び役割分担、世界の動きとの関係性に関する話がありました。次に訪問した資源エネルギー庁では、日本の再生可能エネルギー政策をテーマに、世界の動向についての説明の後、日本のエネルギーの比率や、太陽光、風力、洋上、揚水等の再生可能エネルギーの動向についての話がありました。最後に訪問した厚生労働省では、労働基準法と外国人労働者の採用に焦点をあてた説明がありました。

4日に訪問した東京外国人採用ナビセンターでは、同センターで行っている企業と外国人労働者の求職者に対するサポートに関して説明がありました。企業側に対しては、外国人が就労し始めた際に職場環境に上手く馴染むよう、宗教や文化面での配慮に関する助言をしており、一方で、求職者に対しては直接のマッチングはしていないものの、独特な日本の就活の流れに苦戦する外国人のためにアドバイスをしているということでした。

地方視察

5日には東京を出発、広島へ移動後、広島平和記念資料館、原爆ドーム、広

島城を訪れ、宮島の旅館での滞在を楽しみました。参加者たちは、原爆ドームが爆心に近い場所にあるにも関わらず現存していることに驚き、資料館を訪問した際にはビキニ環礁での水爆実験も話題に上りました。翌6日には厳島神社など宮島内での観光を楽しみ、その翌日の岡山県日生訪問に備え移動しました。

7日は日生町漁業協同組合を訪問しました。同漁協はアマモ（海藻の一種）の再生活動を行っており、経済成長等による環境問題に伴い減少した「アマモ場」を復活させることによって、減少した魚を海に戻す活動に取り組んできました。活動内容の説明後、参加者たちは実際にアマモの種の選別作業を体験しました。



アマモの種の選別作業体験中

太平洋・カリブ 学生招待計画

Student Invitation Program

2023

2023年6月29日から7月22日までの間、太平洋・カリブ地域より計8名の大学生を招待しました。招待学生たちは日本滞在中、上智大学の短期プログラム「Summer Session in East Asian Studies」(以下「Summer Session」)に参加したほか、週末にはA P I C主催の観光イベントを通じて日本文化に親しみました。

約3年ぶりの実施

A P I Cでは2020年まで毎年1月に本計画を実施していましたが、コロナ禍によりしばらく中止となっていました。今般、上智大学の夏季の短期プログラムが数年ぶりに対面で実施されることになったため、今年度は初めて夏季に実施することとして本計画を再開しました。6回目の実施となる今回は、太平洋地域より3名(ナウル、パラオ、ミクロネシア連邦)およびカリブ地域より5名(ジャマイカ、バルバドス、トリニダード・トバゴ、アンティグア・バーブーダ、セントルシア)の学生を招待しました。

招待学生たちはSummer Session(実施期間…2023年6月30日～7月21日)の約3週間の研修期間を通して、日本の文化、教育、歴史、社会のほか、



楽しんでいました。

15日は株式会社エヌアイデイの協力のもと、千葉県香取市佐原を訪れました。現地では千葉県立佐原高等学校の生徒たちと昼食を共にし、香取神宮を参拝し、ご祈禱を受けました。高校生たちにとっても英語で交流する貴重な機会であつたようで、お互い、積極的に話しかけていました。

その後、「佐原の大祭 夏祭り」に参加しました。この祭りは関東三大山車祭りの1つと称され、約300年の伝統があり、ユネスコ無形文化遺産や国の重要無形民俗文化財に指定されています。学生たちは地元の方々に混ざって山車曳き体験をしたあと、屋台で買い物をしたり、「小江戸」と呼ばれる佐原の町並みを眺めたりしていました。様々な日本文化に直に触れることができたと言っており、「これまでで一番思い出深い経験になった」と言う学生も多くいました。

再来日している学生との交流

また、佐原訪問には、過去に本招待計画に参加したことがきっかけとなり、帰国後再び日本を訪れているボビー・スウクーさんも参加してくれました。ボビーさんは2017年のプロ



ボビーさんも参加

グラムに参加後、国費外国人留学生として再び来日し、現在は筑波大学大学院で学んでいます。今回招待した学生の中には今後、日本の大学院に進学することやJ E Tプログラムへ参加することを検討している学生もいて、ボビーさんの自身の経験を踏まえた話を聞くことができたようです。

ボビーさんのように、これまで本計画によって来日したのち、国費外国人留学生やJ E Tプログラム参加者として再来日している学生は他にも複数名おり、本計画が日本と太平洋・カリブ地域のつながりを強めるきっかけとなっていることが伺えます。

在京大使館へ表敬訪問

今回の学生の訪問の機会をもらえて、在京大使館にもA P I Cの活動について理解を深めてもらうという観点



上から、駐日ジャマイカ大使館、駐日ミクロネシア連邦大使館、駐日パラオ共和国大使館への表敬訪問

日本語や東アジアの社会等、様々なテーマに関する科目から3つ選択し受講しました。Summer Sessionには他にも世界中から多数の大学生が参加しており、多様な文化を持つ人々と交流し、共に学べる機会になっています。

週末には日本文化を体験

週末に行われたA P I C主催の観光

から、カリブ5か国からの学生は揃って駐日ジャマイカ大使館を表敬訪問し、また太平洋の学生はそれぞれ駐日ミクロネシア連邦大使館、駐日パラオ共和国大使館を表敬訪問しました。それぞれの大使からは、学生たちには将来、日本とのかけ橋として活動してほしいと激励があり、学生たちも是非日本に留学したい、また訪れたいと述べていました。

修了式・フェアウェルパーティー

プログラム最終日には、上智大学にて修了式・フェアウェルパーティーが開催されました。修了式では重家俊範

A P I C理事長および森下哲朗 上智大学グローバル化推進担当副学長から挨拶がありました。続いて、重家理事長より学生ひとりひとりに修了証が手渡されました。次に、学生たちによるプレゼンテーションが行われ、それぞれが訪れた場所や印象深かったイベント等の写真を見せながら、日本での滞在の感想を述べました。その後のフェアウェルパーティーでは、アデルバイ駐日パラオ大使による乾杯の挨拶があり、学生たちが発表した内容にも触れながら、「今後もさらに多くの学生を呼べるようになる」と感じを述べました。



1. 陶芸体験中の様子 2. 横浜のカップヌードルミュージアムにて 3. 「佐原の大祭」にて

プログラムに参加した8名の学生のうち、4名の感想文を掲載しています。(APICによる和訳)

参加した学生の声

ナウル



(写真左)

南太平洋大学
University of the South Pacific
デルフィーナ・ダニエルさん
Ms. Delphina Daniel

私はフィジーのスバにある南太平洋大学ラウカラキャンパスの三年生で、社会学と社会福祉を専攻しています。このプログラムの参加者に選ばれ、喜びを感じるとともに身が引き締まる思いです。私を信じてくれた方々と神様に感謝します。

南太平洋に位置する小さな開発途上国であるナウルから来た私にとって、日本は非常に洗練された国だと思いました。これまで多くの国を訪れてきましたが、日本の清潔さ、安全性、人々の姿勢には感動しました。携帯電話やカバンを置き忘れたときに、後を走って追いかけて持ってきてくれるほど謙虚な国は見たことがありません。最高の待遇に加えて、日本は素晴らしいトイレも提供しています。他の国々にも日本のトイレを導入することを勧めます。

上智大学の熱意は、私の学問におけるハイライトの一つであり続けます。「ポピュラーカルチャー」の授業は最も興味深く冒険的な科目の一つで、私が今まで受けたどの授業とも異なりました。日本のポピュラーカルチャーについて学び、

それが私の文化とは全く異なるものであること、そして日本がどのように進化してきたかについての専門的な知識を深めることができました。

日本の文化について学ぶことは、私の視野を広げるものでした。日本の陶芸を体験する機会がありました。これは私にとって初めての試みで、日本の食文化の重要性を浮き彫りにする啓発的な経験となりました。

仏教寺院である「浅草寺」も、日本で訪れた素晴らしい歴史的な場所の一つでした。国際色豊かな訪問客でにぎわっており、お土産や骨董品、地元の食品、現代料理と古典料理などを買いました。給でコーティングされた苺やぶどうが売られている様子を見て、この文化の多様性に感銘を受けました。紫色のぶどう味のかき氷は素晴らしい、日本の湿度と気温の高い夏の気候の中でもおいしかったです。人力車にも乗ってみましたがとても楽しかったです。

他にも多くの場所を訪れました。東京スカイツリーでは、東京の街を見渡すことができました。渋谷の街を歩き回って交差点を渡る経験をしたり、素晴らしい寿司や伝統的な料理が提供されている飲食店へ行ったりしました。カップヌードルミュージアムを訪れ、その歴史を知ることが本当に興味深かったです。

日本の文化について学ぶことは本当に多岐に渡り、書きたいこともたくさんあります。これらはすべて私の心に残り、大学の友達にも話したいと思っています。将来また日本を訪れ、この美しい国についてもっと学びたいと思っています。

トリニダード・トバゴ



西インド諸島大学 セント・オーガスティン校
University of the West Indies (St. Augustine Campus)
アヴィエル・ラムキスーンさん
Mr. Aviel Ramkissoon

日本を訪れ、学ぶという一生に一度の機会を得られ、他にはない経験ができました。ここでの思い出や築いた関係は、私の中で最も大切なものの一つになりました。驚くほど速く、効率的な新幹線から、夏風にそよぐ葉のささやきまで、全てが私の関心を引き、わくわく感と畏敬の念でいっぱいになりました。私のこれまでの人生の中では、日本とその文化について音楽やテレビなどのメディアを通じて学んできました。しかし、これらはどれも、実際の日本での生活がどのようなかを正確に教えてくれるものではありません

でした。それは直接の経験でしか学べないことです。日本と私の国との大きな違いの一つは、公共交通機関として地下鉄が運営されていることです。トリニダード・トバゴの公共交通サービスにはタクシーやバス、水上フェリーしかありません。しかし日本では、例えば東京の中心から江ノ島の海岸までどこへでも行けるような、広範な鉄道網があります。ちなみにこれは、私が友達と一緒に訪れた場所です。

日本滞在中に経験した数々の出来事の中で、日本人と交流できたことは、おそらく私にとって最も価値のある経験の一つでした。私はかなり長い間、一人で日本語を学んできましたが、トリニダードにある日本人コミュニティはとても小さいです。そのため、日本人と話し、交流できたのは非常に充実感がありました。これらの交流と関わりを通じて、日本語の練習だけでなく、今まで学べなかった、日本の日常生活の文化的・社会的な側面についても知ることができました。これらの経験は、私が今回築けた新しい関係を維持し、日本との未来を築いていくことを目指す中で、有益であり続けるでしょう。

パラオ



パラオ短期大学
Palau Community College
カーリー・マドランガーさん
Ms. Karly Madrangchar

APICを通して上智大学の東アジア研究をテーマとした短期プログラムに参加した時間は、私の視野を広げ、日本への理解を深め、その文化と歴史への生涯にわたる情熱をかき立てるといって、豊かで革新的な経験でした。このプログラムの独自の特徴である学術的な厳格さと、自分がその環境の中にいるように感じられる体験は、週末に訪れた東京スカイツリーや佐原のお祭り、陶芸教室などの魅力的なフィールドトリップも含め、私の知的好奇心と個人的な成長に忘れられない印象を残しました。

このプログラムのハイライトの一つは、東京の象徴である東京スカイツリーへの訪問です。その壮大な高さを登るにつれて、広大な大都市の息をのむようなパノラマの景色を楽しむだけでなく、日本のアイデンティティを構成する現代的かつ伝統的な一面を垣間見る機会を得ました。そびえ立つ摩天楼は、数世紀前から存在している寺院と調和しながら共存しており、東アジア文化を特徴づける発展と保存の繊細なバランスを反映しています。この経験によって、社会の発展を理解するうえでの歴史的背景の重要性を再確認しました。

活気ある佐原のお祭りに身を投じること、まるで生きたキャンパスに足を踏み入れた感覚で、そこでは伝統と地域社会の筆遣いが融合して喜びに満ちた展覧会となっていました。精巧に飾り付けられた山車が佐原の町中をパレードする光景は、日本の豊かな文化遺産に直接触れる機会となりました。この経験では、文化的な儀式がいかに集団的アイデンティティの維持と、世代間の繋がりへの促進において重要であるかを再認識しました。これは私の東アジア研究の基盤となるコンセプトでした。

陶芸体験は、私たちを伝統的な職人技術の世界に引き込む実践的な活動でした。熟練した職人の指導のもとで粘土を形作りながら、世代を超えて受け継がれてきた職人技術に対して深く理解していきましました。この体験は、文化的な物語の保存と一体感を育むことにおける芸術の役割を説明してくれました。実用的な技術の習得以上に、運動感覚による学びが与える多大な影響を例示しており、私はこれを東アジアの歴史を学ぶ際のアプローチの方針に取り入れました。

上智大学での短期プログラムを通じて、私の旅は、魅力的な週末のフィールドトリップと組み合わせ、文化、遺産、知識の成長の多面的な探求でした。それぞれのフィールドトリップは、東アジア社会を理解するにあたって私の心に忘れられない印象を残しました。今後、日本の複雑さに対するより深い理解および文化的な共感への更なる献身を持ちながら進んでいく中で、私はこの啓発的な学問の旅の中で得られた革新的な経験と生涯にわたる繋がり感謝しています。

アンティグア・バーブーダ



西インド諸島大学 ファイブアイランズ校
University of the West Indies (Five Islands Campus)
ルエッタ・ダリーさん
Ms. Louetta Daly

アンティグアのUWファイブアイランズ校から、データサイエンスの学生として参加したこの冒険は、私にとって今まで経験したことがないものでした。いつか将来、再び訪れる機会を心から楽しみにしています。

短期プログラムの中で、私は「日本語」、「ポピュラーカルチャー」、そして「近代史」の3つの科目を履修しました。これらの科目は、私の日本に関する知識を深め、データサイエンスの研究に組み込むことができる貴重な洞察を得られ、国際的な視点を与えてくれました。

忘れられない思い出の一つは、富士山への訪問でした。この日本を象徴する山を見た瞬間、息をのむほど感動しました。その日の忘れられないハイラ

イトは、初めて温泉を体験したことです。日本の自然美の中で、静かにリラックスできる瞬間でした。

もう一つの大切な思い出は、佐原への日帰り旅行で、私たちは積極的に山車曳きのお祭りに参加しました。この現地での体験は、地元コミュニティとのつながりを感じる機会となり、日本の伝統に対する理解を深め、彼らの活気あふれる文化を垣間見ることができました。

このプログラムで最も充実していた部分の一つは、日本語を学んだことでした。難しかったですがやりがいがあり、実際に日本人と交流し、有意義な対話を行うことができました。

学問的・文化的な経験のほか、私は長く続く友情を築く機会を与えられたことをありがたく思いました。太平洋諸国や、UWの他のキャンパス（モナ、セント・オーガスティン、ケーブヒル、オープンキャンパス）の学生たちと出会い、絆を深めることは忘れられない機会でした。

このプログラムの一員として参加できたことに深く感謝しており、他の人にも参加してみることを心から勧めたいと思います。これは異文化に対する理解を深め、持続的な友情を築き、個人的成長を体験できる素晴らしい機会になります。

太平洋・カリブ 記者招待計画

APIC Japan Journalism Fellowship

2023

2023年10月14日から25日まで、APICは、公益財団法人フォーリン・プレスセンター（FPCJ）の協力のもと、「環境保護と防災」をテーマとし、太平洋島嶼国・地域から4名、カリブ地域の国から1名の計5名の記者の参加を得て、「太平洋・カリブ記者招待計画」を実施しました。

参加者は、ソロモン諸島からロバート・イロガ氏、バヌアツからアニタ・ロバーツ氏、フィジーからシャール・デビ氏、グアムからトマス・マンガローナII氏、トリニダード・トバゴからライアン・ベイチュー氏。加えて、プログラム・コーディネーターとしてフロイド・タケウチ氏、副コーディネーターとしてドーン・マタス氏の2名も参加しました。この記者招待計画においては、各記者はプログラム・コーディネーターの指導の下、毎日、取材を終えた後、確認・打合せを行い、記事を1本以上執筆することが了解されています。なお、地方視察にはAPICの側嶋常務理事代行が同行しました。

今回、一行は、都内のほか、鹿児島県大崎町、熊本県人吉市、南阿蘇村、熊本市で取材を行いました。

本計画は、2015年以降毎年実

設を視察し説明を受けました。

20日は、午前中、南阿蘇村の熊本地震震災ミュージアムKIOKUを訪問し、2016年の熊本地震の状況や予め予測することができない地震に対する備え等について説明を受けました。午後、熊本日日新聞社を訪問し、編集局長から2020年の豪雨災害の際の同新聞社の対応や教訓について説明を受け、同新聞社を案内してもらいました。なお、記者たちは同新聞社の記者から取材を受けました。

21日午前、一行は、地震災害から復興途上にある熊本城を訪問し、ボランティアのガイドから熊本城の地震被害や復興状況等について説明を受けました。

施してきましたが、コロナ禍のために2020年と2021年は中止し、2022年に再開して、2023年で通算7回目の実施となりました。

都内視察とブリーフィング

10月15日に記者たちはプログラム・コーディネーターと合流し、最初の助言を得て都内を経験した後、16日にAPICにおいてプログラムについての全般的な説明を受けました。また、APICの業務等について、重家理事長に個別のインタビューを行いました。それから一行は外務省を訪問し、アジア大洋州局大洋州課と中南米局カリブ室から、各国・地域と日本との関係等について説明を受けました。

鹿児島大崎町にてリサイクルの状況を取材

一行は、17日に鹿児島県に移動し、19日朝まで、ごみを27品目に分別し14年連続リサイクル率日本一（2020年、83.1%）を誇る大崎町の取組について視察し取材を行いました。この間、東靖弘大崎町長を尊敬し、同町の政策や取組について説明を受け、埋

再び都内視察およびプログラム修了式

22日に記者たちは着物着付けと茶道を体験し、日本文化を学びました。23日には、世界の水問題にチャレンジするベンチャー企業WOTA株式会社を訪問し、同社の製品について説明を受けました。同日夕方にプログラム修了式と重家理事長主催夕食会が開催され、各記者は取材の成果を報告しました。記者たちは、視察したリサイクルの取組が大変参考になったこと、実施した報道に対し既に自国で大きな反応があったことなどについて、披露しました。

一行は、24日に朝日新聞社を訪問し、

熊本市役所で2020年の豪雨災害の状況と被災後に水ノ手橋に球磨川の氾濫危険度を知らせるライティング防災アラートシステムを設置したこと等について説明を受け、水ノ手橋を視察しました。その後、鍋屋旅館で被災の説明を受け復興状況を視察し、大和一酒造元で被災の状況とそれを教訓に改造新築された酒蔵施



上：改造新築された酒造施設
下：熊本地震震災ミュージアム KIOKU にて

滞在中の主なスケジュール	
10/14（土）	来日
10/15（日）	都内視察
10/16（月）	APIC によるプログラムオリエンテーション 外務省ブリーフィング（大洋州課、カリブ室）
10/17（火）	鹿児島へ移動 埋立最終処分場（曾於南部厚生事務組合清掃センター）、そおりサイクルセンター視察
10/18（水）	有機堆肥工場 視察 大崎小学校、大崎町役場 訪問
10/19（木）	大崎町ごみ出し視察・住民へのインタビュー 熊本県人吉市へ移動 人吉市役所 訪問 水ノ手橋（防災アラートシステム）、鍋屋旅館、大和一酒造元 視察 熊本市へ移動
10/20（金）	熊本地震震災ミュージアム KIOKU 視察 熊本日日新聞社 訪問
10/21（土）	熊本城ガイドツアー 東京へ移動
10/22（日）	着物着付けと茶道体験
10/23（月）	WOTA 株式会社 訪問 プログラム修了式・重家 APIC 理事長主催夕食会
10/24（火）	日本メティアとの懇談
10/25（水）	離日



ジャーナリスト同士として活発な意見交換を行いました。



住民による実際のごみ出し視察



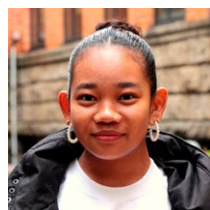
肥料生産過程を体験

ザビエル
留学生

「ザビエル留学生奨学金」は2014年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APICの三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学への留学生を支援するプログラムです。本奨学金制度により、これまでに6名が本奨学金制度によって上智大学を卒業しました。

第8期ザビエル留学生が上智大学に入学

2023年9月21日、第8期ザビエル留学生としてパラオ出身のユリ・ホセイさんと、ミクロネシア連邦出身のイザベラ・コストカさんが上智大学に入学しました。



第8期ザビエル留学生
ユリ・ホセイ さん
Ms. Yuri Hosei

私の名前はユリ・ホセイで、パラオ共和国出身です。島の自然に囲まれながら育つ機会に恵まれた私は、清らかな環境を維持することの重要性に気付きました。私はパラオ人の父と日本人の母を持つ多民族な家族の長女です。幼い頃から、それぞれの言語や多くの伝統的な慣習、そして異なるけれども似ている生活様式まで、両方の文化に触れてきました。自分の経験を胸に誇りに思い、高等教育を受けて得られた成果を故郷の島と共有することを楽しみにしています。

私の上智大学と日本での人生全体を通じて、上智大学SPSF(※)の一環として提供される総合人間科学部教育学科で学ぶ機会を最大限に活かし、同時に、島で子供時代を過ごしている間に見逃してしまった日本のライフスタイルで生活を豊かにしたいと思っています。持続可能な未来に着目する本プログラムを通じて、私は持続可能な開発目標(SDGs)を繰り返し意識するようになり、また、持続可能性に関連する教育コースを履修することで、パラオの未来に対する期待と不安のどちらも感じています。ここで学べることはとても多いです。

上智大学、APIC、およびザビエル高校が提供してくれたこの機会に対して、私は感謝の意を尽くすことはできません。私はこの分野でたくさんの知識を獲得し、ミクロネシア地域における教育の質を向上させるために努力します。

(※ Sophia Program for Sustainable Futures の略。6学科連携の英語コース)



第8期ザビエル留学生
イザベラ・コストカ さん
Ms. Isabella Kostka

日本へ行って学問を続ける決断をするのは簡単なことではありませんでした。大学選びをしていた際に、私が昔、ザビエル高校に進学することを決めたときのことを思い出しました。当時13歳の私にとって、家族から離れた場所に住み、自立する方法を学ぶのは、難しい状況でした。ところが、日本に来て初めて、島での生活から都会での生活に移行することが、他にはない大きな変化であることに気付きました。

日本に着いた途端にカルチャーショックを受けました。混雑した電車や人の多さが私を不安にさせました。その時、こんなに忙しい街でどうやって生き延びていくのか、悪い方向に考えすぎてしまうようになりました。ホームシックの気持ちが湧き上がり、日本に来ることが正しい選択だったのか心配になりました。しかし、人混みを抜けて大きな建物と明るい光景を目にしてから、すべてが変わりました。その瞬間、不安が消え、落ち着いた気分になりました。街並みに魅了され、日々をどのように過ごすか空想し始めました。

その後、ついに上智大学のキャンパスに足を踏み入れる日がやってきました。すべてが私を驚かせました。日本のような先進国ではない国に住んでいたのに、自動販売機でさえもワクワクしました。キャンパスを歩き回り、友達と笑い合う学生たちを見て、歓迎されているように感じました。その時、私は自分にとって正しい場所を選んだのだとわかりました。

上智大学を卒業するだけでなく、大学で学んだことを日常生活の中でも活かし、持続可能な未来のために貢献できる人になることを望んでいます。これから起きるどのようなことでも参加する意思はあります。恵みであろうと困難であろうと、日本と上智大学が提供する経験から学びたいと思っています。



今期の
新入生たち

留学生支援事業



第1期 APIC-UWI 留学生
ニキータ・クナール さん
Ms. Nikita Kunar

活気あるカリブ海の中心にあるバルバドスのターコイズブルーの海。私、ニキータ・クナールは、常に夕日が空に傑作を描く場所から来ました。そして今回、新たな旅が私を日出づる国、日本へ導いてくれました。ここでは、名門の上智大学で、地球環境学の修士課程を追求するスリリングな冒険に乗り出しました。

秋学期が始まって以来、都市の持続可能性、リサイクル工学、戦略的環境マネジメントなどの授業は非常に興味深いものでした。さらに、上智大学の教授やスタッフは信じられないほどサポートしてくれており、私の新しい生活への移行をスムーズに進めることができています。

日本では、毎日が平穏と畏敬の念で彩られたキャンパスのようです。来日して以来、自然と都会の奇跡との融合に魅了されています。たい焼きと緑茶は愛おしいコンビになり、カピバラやナメケモノと出会ってワクワクしました。言語に関して言えば、夢中になっています。今後の人生の中で、流暢に話せるようになるといいなと思います。今は話すよりも聞くことに重点を置いて一歩ずつ進んでいます。日本での滞在期間が終了するまでには日本語で会話ができるようになることを願っています。日本にいる今、正直に言うところまでで一番心が穏やかです。東京はとても便利で、電車のシステムも非常に効率的で、生活をとても楽にしてくれます。

最後に、日本と上智大学での経験は今のところ豊かなものになっています。APICと上智大学が提供してくれた機会に心から感謝しており、この楽しい冒険が続く中、日本文化や環境学にさらに没頭したくてたまりません。

カリブ地域の環境問題に携わる人材の育成を行うという観点から、西インド諸島大学(UWI)の協力のもと、APIC・MCT留学制度と同様の大学院留学制度が創設されました。今般、UWI・上智大学・APICの三者間の協定が締結され、2023年度より毎年、UWIからの学生1名が上智大学大学院地球環境学研究科へ入学することが可能とな

りました。この制度は、大学院での学びを通して、カリブ地域の国々の環境問題に関与して取り組み、国際社会に貢献できる人物を育成することを目的とします。本年度は第1期生として、UWIケープヒル校の卒業生ニキータ・クナールさんが同研究科に入学しました。今後2年間をかけて修士号取得を目指します。

New
「西インド諸島大学(UWI)大学院生支援制度」を新設

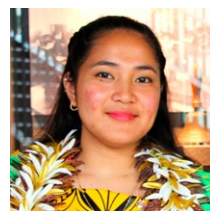
第5期 APIC-MCT 留学生が上智大学大学院を卒業

2023年9月20日、第5期 APIC-MCT 留学生のシャナイア・アーノルドさんと
ナターシャ・ゴロンさんが上智大学大学院を卒業しました。
2名は同大学院地球環境学研究科で2年間、勉学に励みました。



上智大学大学院を卒業した第5期 APIC-MCT 留学生のシャナイアさんとナターシャさんに、在学中の経験や今後の目標についてインタビューを行いました。

INTERVIEW



第5期 APIC-MCT 留学生

シャナイア・アーノルド さん
Ms. Shaniah Arnold

1. 上智大学での学生生活について教えてください。ここで学ぶことを決断した理由は何ですか。どのような勉強・研究をしていましたか。
上智大学での私の生活はすべて読書に捧げられていました。授業や卒業論文に関連する資料を読まない日はなかったような気がします。正直に言うと、私はこの奨学金の受給者の一人として選ばれたため、上智大学で学ぶことを選びました。そのため、地球環境学の高等教育を追求することを決めました。

2. コロナ禍で大変な時期もあったかと思いますが、どのような学生生活でしたか。
上智大学に通うにあたって難しかったのは、最初の学期がコロナ禍の影響でオンライン授業だったことです。当時は日本ではなくハワイにいたので、時差もあって大変でした。授業時間が午後3時から深夜0時または1時までになるときもありました。

3. 日本滞在中、最も印象に残っていることは何ですか。
卒業論文のことを忘れるために、友達と小さな冒険に出かけたときです。私にとってのストレス発散の手段でした。これらの小さな冒険が、日本での時間を楽しむことにつながったと思います。

4. 上智大学や日本に来て良かったと思ったことは何ですか。何か目標を達成できましたか。
私は様々な国出身の新しい友達を作りました。たとえば、ベトナム、イタリア、日本などです。目標については、卒業論文を完成させることと卒業すること達成できました。ただ、一つ達成できなかったこともあって、それは日本語を話せるようになることでした。

5. 今後の目標について教えてください。
チュウク環境保護機関で働きながら、法学位を取得するために法科大学院を探し続けようと考えています。

6. これから日本に留学する学生にメッセージやアドバイスがあれば教えてください。
大学院では難しいこともあるかもしれませんが、最終的にそれだけの価値があることがわかります。諦めないでください。助けが必要なら、先輩たちに頼ってください。あなたが助けを必要としているときのために、私たちはいつでもここにいます。

APIC-MCT 留学生

「APIC-MCT 留学生奨学制度」は、上智大学・ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust : MCT) ・APIC の三者間の合意に基づき、ミクロネシア3カ国からの留学生を受け入れ、上智大学大学院地球環境学研究科での修士号取得を支援するプログラムです。2017年のプログラム開始以降、これまでに9名が卒業しました。

INTERVIEW



第5期 APIC-MCT 留学生

ナターシャ・ゴロン さん
Ms. Natasha Gorong

1. 上智大学での学生生活について教えてください。ここで学ぶことを決断した理由は何ですか。どのような勉強・研究をしていましたか。
上智大学で学びたかった主な理由は、提供されているプログラムと、私が母国で行っている研究に対する奨学金の支援を受けられるからです。さらに、私はアメリカのほかに、新しい国でまた違った経験を得たいと思っていたので、良い機会となりました。私が所属していたのは地球環境学研究科で、この研究科では自分や他の学生が、研究においてどのトピックに焦点を置くかを非常に柔軟に選ぶことができた点に気に入っています。

2. コロナ禍で大変な時期もあったかと思いますが、どのような学生生活でしたか。
授業をオンラインで、かつ違う国から受けることは確かに難しい課題でした。私は地球の反対側にいたので、一番早い授業でも夜の10時頃開始だったので、早く授業でも夜の10時頃開始だったことを覚えています。毎週一日、授業が夜10時頃から朝5時頃までの日があり、その日を非常に恐れていました。しかし、一緒に住んでいた

3. 日本滞在中、最も印象に残っていることは何ですか。
日本滞在中、最も印象的だったのは、おそらく江の島のランタンフェスティバルへの日帰り旅行でしょう。これは私にとって初めての体験で、日本のさまざまな文化を見て学び、美しい風景を探索することもできました。また、この日は太平洋を再び見ることができた日でした。私の故郷がある海なので、私にとって特別な瞬間でした。故郷を思い出し寂しくなるとともに、いつか帰ることが楽しみにになりました。

4. 上智大学や日本に来て良かったと思ったことは何ですか。何か目標を達成できましたか。
一番良かったのは間違いなく、まったく新しい経験に挑戦できたことでした。アメリカに初めて行った時と同様に文化の違いは感じましたが、今回はさらに言葉の壁もあり、あまり日本語を知らなかったためにさらなる課題がありました。上智大学に関しては、学部とは異なり、環境分野のさまざまな部門の専門家から学ぶことができて良かったです。これは、自分の研究をさらに深く理解するきっかけとなり、いつか他の人々に自分のスキルと知識を提供し貢献したいと思う気持ちを強くしました。

5. 今後の目標について教えてください。
私はいつも、故郷に戻って地域社会に還元し、同時に両親の面倒を見ることを計画していました。両親は環境分野で働いており、それが私のキャリアにおいて大きな影響を与えました。さらに、幸運なことに、父は私に自分たちの文化や、ヤップ（故郷）の環境と文化がどのような相互関係にあるかを教えてくれました。環境を軽んじることは、文化を軽んじることもと言える、という考え方です。今後どのような仕事や役割に携わることになっても、環境と文化に対する認識や、その両者を保存することの必要性を忘れないようにしたいと思います。また、より多くの人々に私たちの故郷に戻ってくることを勧めたいと思っています。ここにはたくさんのお机があるのに、私たちはそれに気付いていないだけなのです。

6. これから日本に留学する学生にメッセージやアドバイスがあれば教えてください。
将来の学生に送りたい唯一のメッセージ・アドバイスは、夢中になって進める道を選んで良いのだということです。また、その道中で、自分自身に挑戦することを選んでほしいと願っています。それが成長し、新しいことを学び、自分の手が届く範囲にあるにもかかわらず達成できなかったことを達成する唯一の方法だからです。新しい挑戦はまた、自分自身に自信を持たせ、私たちが世界に与えられるものがたくさんあることを知るきっかけになります。



APIC 早朝国際情勢講演会

毎月1回（8月以外）開催されるAPIC早朝国際情勢講演会では、外務省幹部、在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができます。参加者からの評価は極めて高いものがあります。

新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、2021年5月からはオンラインでの配信も開始しました。現在は会場・オンライン同時配信で開催しております。

本講演は、APIC維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載しているAPIC事務局の連絡先にご照会ください。

講師・演題一覧（2023年7月～12月実施分）

- 【第397回早朝国際情勢講演会】
日時：令和5年7月20日（木）
講師：外務省国際協力局長 遠藤 和也 氏
演題：「主要な開発協力の課題と日本の対応」
- 【第398回早朝国際情勢講演会】
日時：令和5年9月14日（木）
講師：外務省南部アジア部長 中村 亮 氏
演題：「南部アジア情勢と日本外交」
- 【第399回早朝国際情勢講演会】
日時：令和5年10月19日（木）
講師：外務省地球規模課題審議官（大使） 赤堀 毅 氏
演題：「日本の気候外交 ―COP28 と今後の課題―」

- 【第400回早朝国際情勢講演会】
日時：令和5年11月16日（木）
講師：東京大学教授／JICA 緒方貞子平和開発研究所 シニア・リサーチ・アドバイザー（前所長） 高原 明生 氏
演題：「習近平政権の最近の動向と日本外交」
- 【第401回早朝国際情勢講演会】
日時：令和5年12月21日（木）
講師：外務省欧州局長 中込 正志 氏
演題：「ロシアによるウクライナ侵略」

APIC-MCT 留学生

第7期 APIC-MCT 留学生が上智大学大学院に入学

2023年9月21日、第7期 APIC-MCT 留学生として
ミクロネシア連邦出身のポール・チャーリー Jr. さんが上智大学大学院に入学しました。



第7期 APIC-MCT 留学生
ポール・チャーリー Jr. さん
Mr. Paul Charley Jr.

上智大学大学院に修士課程の学生として入学するにあたって、まず、学部生として入学した時を振り返りました。これら両方の瞬間は様々な点で似ています。そのうちの一つは、勉強して学位を取得する旅を始めることに対する期待と不安が混ざった気持ちです。しかし、今回は異なります。なぜなら、私はすでに上智大学という洗練された機関で4年間学んだ経験を持っているからです。学部在籍中に得た実績から、この大学に戻ることが学びの経験を強め、国際教養学部で学んでいたときよりも多くのものを提供してくれると確信しています。

学内外での学生生活において、授業に出席したり、課外活動に参加したり、世界中から来た他の学生と交流したりすることで、素晴らしい経験を積んできたことを強調したいです。自分の故郷であるミクロネシア連邦の島を離れ、到着時にはまだよく知らなかった国で大学生として過ごした4年間でとても好きでした。さらに、大学は常に私が学びたかったことを学ぶ機会を与えてくれました。そして可能なときは、そこで得られた知識を東京での日常生活に活かすことができました。このような有益な経験を持っていることは、大学に戻る際にかなりのアドバンテージを持てると信じています。

私は修士課程の学生として、故郷のミクロネシアに環境の変化や改善をもたらすことを目指し、それらに関連する数々の成果を達成できるよう努力したいです。そのためには膨大な量の経験と知識が必要であることを十分心得ています。地球環境学研究科で学ぶ過程でそのような要素を身につけたいと思っています。この機会を得られて、一生感謝し続けます！

「ザビエル高校留学生奨学金制度」へのご寄付のお願い

学生への支援をより一層充実させるため、本奨学金制度へのご寄付をお願いしております。いただいた寄付金は、留学生の受け入れにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等に活用させていただいております。

皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様の温かいご支援に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力をお願い申し上げます。

- 対象** ザビエル高校卒業生（毎年1～2名入学）
- 留学先** 上智大学国際教養学部 / 理工学部英語コース / Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)
- 奨学金** 卒業までの4年間の奨学金を授与
- 振込先** 三菱UFJ銀行 本店（店番 001） 普通口座 1660339
口座名：一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口
カナ名：ザイ）コクサイ キヨウリョク スイジン キヨウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

●ザビエル高校（Xavier High School）とは

1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で、生徒の数は約150名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元大統領やクリスチャン元大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。



Photo courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos



ハイチを代表するラム酒メーカー・バーバンクール社の150周年記念ボトル

オークの樽で何年も寝かせると味は丸くなり香りも甘くしっとりとして、ブランデーと同じように「味と香」を楽しむことができます。バーバンクール社は、200年以上の歴史があり、古くからの樽もあるみたいですが、その貯蔵庫も2010年の大震災時に被害にあったとかで、その収拾も兼ねて、幾つかの樽をブレンドして150周年記念ボトルが売りに出されたとのこと（少なくとも40年以上寝かせた樽のラム酒がブレンドされているとか）。また、小さい蒸留所（500件以上との説も！）で、同じ材料からほとん

ど同じようなお酒を蒸留しているものがあり、これらはクレラン（Clarin）と呼ばれています。いわゆる地酒として広く楽しまれていますが、時折規定外の混ぜ物をした粗悪品が出回らしく、集団で亡くなる、いたたましい事件が発生したりしています。

グラン・マルニエ

西洋菓子作りやカクテルに欠かせないオレンジリキュールの「グラン・マルニエ（Grand Marnier）」や「コアントロー（Cointreau）」はフランスを代表するリキュールですが、実は、その材料であるビター・オレンジ（使われるのは皮だけです）はハイチ産の「シトラス・ビガラディア」であり、その風味からハイチ産でなければならぬといった材料で、味と伝統を支えているといっても過言ではありません。この苦みと風味のある柑橘類はハイチの北部で栽培されており、グラン・マルニエは全量が、コアントローはブラジル産のものと半々で作られ、風味が異なります。実はこんなところでもハイチの御世話になっている（知らずに食べているお菓子やカクテルの方でも）ということですよ。

ここでハイチと関係のあるものを口にしているかも知れません。以下に少し御紹介します。

砂糖とサトウキビ

ハイチは、日頃我々も御世話になっている「砂糖」の発展史に残る重要な国です。当初アジア起源のサトウキビは後にヨーロッパに伝わり、この栽培地を求めてアフリカ等に進出しましたが、ご存じのロンブスが1493年の第二回目の航海の折に苗をイスパニョーラ島にもたらしたのがカリブにおけるサトウキビの起源とされています。その後時を経てプランテーションとしてフランスの経済を大きく支え、かつ現代に花開く各種フランス・欧州菓子の下支えをすることになります。ハイチで作られた砂糖がなかったら、もしかするとチョコレートやケーキ、タルト等は今の形で存在していなかったかも知れません。

今でもサトウキビ畑は主要な産地に広がっており、その生産量は過去に比べればかなり減っているもののメジャーな農産物ではあります。サトウキビそのものもリヤカーに満載され、道ばたでカットして売られています（繊維質ですが、そのまま噛むと甘い

コーヒー（ヤカオ）

ハイチもコーヒー豆の産地であり、古くは1726年にマルティニークからフランス人が持ち込んだとも言われています。コーヒー豆では高級種と言われているアラビカ種でもその源流の一つであるティピカ種が多く栽培されており、バランスのとれた香良くほぐよく柔らかい甘みとコクのある美味しいコーヒー豆を産します。実は、ハイチでは、1700年代後半には全世界のコーヒー生産量の半分を産出したと言われているほど商品作物として重要な位置づけにありました。その後生産量は減り続け、さらに病気により生産量は激減したと言われており、またハリケーンの影響や温暖化の影響などを受けて生産量自体は限られる面もありますが、今も各地で栽培に取り組むなど新しいチャレンジもしている模様です。ドリップしてもいいですし、適度の酸味もあり、エスプレッソでもバランスとアフターがあり大変美味しいです。

パート2：ハイチ・クレオール料理

ハイチにおけるクレオール料理・日常食などを中心に主なものを以下に御紹介します。

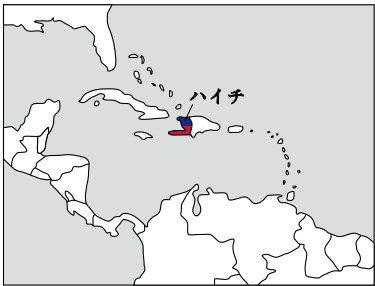


スープ・ジロモン（具沢山のキャベツのスープ）

諸説あるかと思いますが、簡単には、フランスの入植者達が食べていたもので、当時の奴隷には食べる権利がなかったという時代を経て、1804年の独立を機に、新自由人がその象徴（特権階級であったフランス人入植者と対等を意味するものとして）としてスープ・ジュームを食し、また、建国の祖ジャン・ジャック・デサリーヌの妻、マリー・クレール・ウールーズ・

スープ・ジューム

ハイチの伝統・文化的&歴史的な意味で避けて通れないのは「かぼちゃのスープ」でしょう。1月1日の独立記念日に食べるスープ・ジューム（Soup Joumou: クレオール）＝スープ・ジロモン（Soupe Groumon: フランス語）という具沢山、牛肉も入ったかぼちゃ・スープです。



第11回「ハイチ便り」（最終回）

ハイチの文化 ～食材や食文化について～

寄稿：在ハイチ日本国大使（当時） 八田 善明

APIC ウェブサイトでは、八田善明 在ハイチ日本国大使（当時）寄稿の連続コラム「ハイチ便り」を配信しております。日本で知られることの少ないハイチ共和国の政治、社会、文化などについての情報を発信し、日・ハイチ関係の増進を目指します。本誌では第11回「ハイチ便り」（最終回）の内容を掲載しています（2018年時点での執筆記事）。その他の「ハイチ便り」については、APIC ウェブサイトをご覧ください。

ハイチは、（ハイチ）クレオール料理でも知られています。その歴史と自然の恵み、文化の交流するところでもあり独自の食文化が発展しながら根付き、さらに革新を加えながら発展を続けています。

ハイチ・クレオールと呼ばれる、歴史的な経緯からのフランス系の要素と先住民のもの、そしてアフリカから持ち込まれたものが混ざり・かつ伝統が維持されながらできあがった一つの食文化です。

これらのベースに加えて、スペイン的なもの、他の中南米でも見られるものや最近ではアメリカなどの影響も受けつつ、日常の食事からレストランで楽しむグルメの域までその裾野は広がっています。

また、クレオール料理に加えて、ハイチを代表する「食材や食品」にはそれ以外にも特徴的なものがありますので、合わせて御紹介してまいりたいと思います。

パート1：世界ともつながりのあるハイチ産品や原料

直接であったり、間接であったり、歴史的にであったりと実は知らないこと

今でもサトウキビ畑は主要な産地に広がっており、その生産量は過去に比べればかなり減っているもののメジャーな農産物ではあります。サトウキビそのものもリヤカーに満載され、道ばたでカットして売られています（繊維質ですが、そのまま噛むと甘い

ラム（酒）とその兄弟

サトウキビがあるところにはラム（Rhum/Rum）がある、と言えるかと思いますが。中南米・カリブ諸国でサトウキビ・プランテーションがある国々にはそれぞれにラムがあります。その多くは、サトウキビのジュースを煮詰めて砂糖を結晶化させた後に残る糖蜜（メラス（フランス語）、モラセス（英語））を原料として、これを発酵（アルコール化）させて、蒸留するプロセスによるものですが、ハイチの代表的なラム酒メーカーであるバーバンク



ハイチの黒糖ラパドゥ

いジュースが楽しめます）し、産地ではサトウキビをアトリエに持ち込み、ジュースを絞って、何段階もかけて煮詰めて黒糖にしたりしています（ハイチでは、ラパドゥ（Rapadou）という、棕櫚で巻いて保存します）。



1. ランビ・クレオール 2. アクラとマランガ芋
3. 左側の付け合わせの黄色いのがバナヌ・プゼ
(料理自体は鱈のコロッケ)

ブームにもって欧米等で、高値で売買されていて、必ずしも生産地で安くは売られていないとも聞きます。

ランビ (Lambi)

周りが海で囲まれているので、スズキみたいな魚、伊勢エビなども捕れますが、海が暖かいのと漁業がそれほど発達していないこともあり、ここでも、大きな巻き貝のランビが（ハイチだけでなく）カリブ海周辺の名物です。コンチ（貝（Conch: 英語））ともいいますが、直径数センチ程度になる身を、そのままだと歯ごたえもありすぎるでしょうから、細長く切ったり裂いたりして調理（味付け）して供します。ここでピリ辛のソースで調理したものはクレオール風ということで、「ランビ・クレオール」となります。例えば、

か多り、そして仕上げに深く油で揚げます。しっかり茶色に色のついたグリオは、外側はカリカリで中は柔らかく美味しいです。ちょっとピリ辛に仕上げるのがクレオール流でしょうか。典型的な盛り付けは、ピクリーズ（Pikliz）という野菜の唐辛子（Piment Bouc）漬け（見た目は浅漬けのようですが、かなり辛いです。間違っても付け合わせのサラダだと思って纏めて口に入れたはいけません。少しを肉（グリオ等）に味付けとして合わせて食べるものだと思います。）後はお米か食用バナナが付いていることが標準的です。

ディリ・（アク）・ジョンジョン (Diiri (ak) djon djon)

ハイチの伝統料理の一つがジョンジョン風味のライスです。濃い灰色から黒っぽいご飯なので、初見ではイカスミのご飯？と思わなくもなく、キノコだと解るまでにはしばらくの時間を要しました。ハイチの北部で採取されるキノコの一種で乾燥して販売されています（キクラゲのフレークのようなイメージでしょうか）。この調理法も手間あり、乾燥したジョンジョンをボウルに張った水につけて一晩寝かすと灰色に色が出るので、そこで細かい

フェリシテ・ボヌールが、滋養に満ちたこの具沢山のスープを1月1日に食するように広めたとされています。かぼちゃベースのスープですが、牛肉が入っているのが特徴の一つと言えるかと思います。入れる野菜は個人や家庭毎に好みや味があるようです。野菜は、ジャガイモ、にんじん、カブが標準のようで、香味としてセロリも入っていることがあります。

いずれにしても国民食でありハイチ人のコミュニティにおいても欠かせないもののようです。大きなハイチ人コミュニティがある米国フロリダ州のマイアミにおいても1月1日を前に新聞のマイアミ・ヘラルドにもスープ・ジュムーの記事が掲載されたりしています。

の灰色に色が出るので、そこで細かい

のが混じらないように網等でキノコを取り除き、灰色の汁を調理に使います。キノコ本体は、全部捨てると聞きました。その灰色の汁を使って、米を炊けばディリ・ジョンジョンですし、今風であればパスタソースにアレンジしたり、肉（鶏肉など）のソースとしても使えます。なかなかコクと旨味がのって美味しく、ハイチを去るとかなり懐かしい味の一つです。なお、最近のレシピでは、ジョンジョンを水に浸すのではなくミキサー等でそれ自体をソースに仕立てるというものもあるようです。このジョンジョン茸はどこにでも生えているわけではなく、まだ栽培もできていない（らしい）もので、ハイチ以外では聞かないハイチ・オリジナルな素材だと思われるます。

なお、地元産の米に



ディリ・ジョンジョンの左上は通常の付け合わせ、左下は少しきどったレストラン風、右上はジョンジョン・スパゲティ、右下は乾燥ジョンジョン茸

に切って、二枚の板でこれをつぶし広げ（つぶすので、周りがぎざぎざの4〜5 cmの輪切りになります）、揚げて出できます。単純ですが、やはり外はきくきく、中はほっこりしているのが美味しいです（固いだけで唾が足らなくなるのもありますが）。

その他の料理や食材

以上、代表的な料理等を挙げてきました。この他にも、カブリ（アフリカでも見かける山羊の一種）や牛肉を先ほどのグリオの様に調理したものは、タソ（Taso/Tasso）と呼ばれて、これもポピュラーです。また、海辺では、ロブスター、タコ、魚も良く食べられます。

ハイチでは、野菜としてはゴンボ（オクラ）やパンの実なども見かけます。フルーツは、柑橘類は種類が多く、バナナも美しく、また、どこにでもマングローブがあります。さらには、標高が高い高原もあり、そこではイチゴも栽培しています。

ココナッツも路上で売っており、その場で、マシエット（鉈）で端を切り落とし飲み口を作ってくれます。丸ごと冷やして飲むココナッツ・ウォーターは、実の熟れ具合等で量も味も（甘みやくせ（旨味？））異なり色々と楽



街中の椰子の実売り：ココナッツ・ウォーターのため



ビール工場とプレスティージュ・ビール

（※写真は筆者が撮影）
（※本コラムの内容は、筆者の個人的見解であり、所属する機関の公式見解ではありません。）

しめます。

食材ではないですが、ハイチのビールもあり、プレスティージュ（Prestige）は日本人好みの飲みやすいキレの良いビールです。

また、美容と健康の面では、モリンガとヴェイバーにも注目かも知れません。



バルバドス 歴史の散歩道

その3 第2部 イギリス人の植民地ビジネス

寄稿：前 駐バルバドス日本国大使 品田 光彦

APIC ウェブサイトでは、品田光彦 前駐バルバドス日本国大使寄稿の連続コラム「バルバドス 歴史の散歩道」を配信しております。本誌では「バルバドス 歴史の散歩道（その3）」の内容を掲載しています（2021年執筆）。その他のコラムについては、APIC ウェブサイトをご覧ください。

バルバドス西海岸にホールタウンという町があります。

このあたりは観光立国バルバドスのなかでも外国からの観光客が多く行き交う場所で、ホテルや貸別荘、レストラン、ショッピングモールなどが軒を連ねています。

現在ホールタウンがある地点の沖合いに、1625年5月14日、「オリープの花」号というイギリスの武装商船が錨を降ろしました。この船は何週間か前にブラジルでの取り引きをすませ、イギリスに戻ろうとしていたのですが、進路を西に取り過ぎて、たまたまバルバドスに着いたのです。

今からおよそ400年前の、この「たまたま」が、それ以降のバルバドス島の運命を決めることになります。

はじめの入植者たち

「オリープの花」号の船長はジョン・パウエルという男でした。

島に上陸したパウエルと乗組員たちは、これがスペインやポルトガルの船がときどき立ち寄っていたという「バ

になります。はじめのうちの主な産品はタバコ、ショウガ、インディゴ（藍）、海島綿（註）などでした。

コーティーン卿は、新たな入植者や生活物資をどんどんイギリスから送ってパウエルたちの開拓を支援します。コーティーン卿をパトロンとするこの島での待遇が悪くなかったこともあって、島の人口は徐々に増え、入植開始から2年後には人口がおおよそ1800人となったという記録が残っています。

島ごと盗まれた

ところが間もなく、コーティーン卿の植民地ビジネスは別の人物に横取りされてしまいます。

先にふれた「ジェームズタウン」の地名の由来になった国王ジェームズ1世は、もともととはイングランドではなくスコットランドの王でした。1603年にイングランド・チューダー朝最後のエリザベス1世女王が世を去ったのですが、女王には後継ぎがなかったため、血縁があったスコットランド王ジェームズ6世が迎えられてイングランド王ジェームズ1世となったのです。これがステュアート朝のは



現在のホールタウン市街



ホールタウン付近の海岸。1625年、最初のイギリス船がこのあたりに着きました

ルバドス」という島で、どうやら噂どおり無人島らしいことを見てとりました。打ち棄てられた先住民の集落や生活の痕跡がところどころにあるのですが誰もいないのです。彼らは船に引きあげて、本国への帰路を急ぎます。

パウエルはイギリスに戻ると、さっそく「オリープの花」号の出資者であるウィリアム・コーティーン卿に島のようすを報告しました。ロンドンで手広く商売をしていたコーティーン卿は「これはカネになるかもしれない」と思ったのでしょう。今度はジョン・パウエルの弟、ヘンリー・パウエルを船

じまりです。

ジェームズ1世の取り巻きのひとりにジェームズ・ヘイという人物がいました。イングランド王になったジェームズ1世と一緒にスコットランドからロンドンに出てきたヘイは、王により伯爵に叙せられて「カーライル伯」となります。バルバドスにせっせと投資していたコーティーン卿から島の利権を奪い取ったのは、このカーライル伯ジェームズ・ヘイです。

彼は伯爵に成り上がったものの、もともと浪費癖がひどくて借金漬けでした。そこで窮状を脱するために植民地ビジネスの儲け話を利用することを思いついたのです。彼は王室とのコネをフル活用して、ジェームズ1世のあとを継いで国王になった、息子のチャールズ1世を適当に言いくるめ、バルバドスの植民地利権をコーティーン卿から横取りしてしまったのです。詐欺まがいの行為で、バルバドス経営の国王特許状を手に入れたカーライル伯はさっそく、見たこともないバルバドスの土地1万エーカーについてロンドンの商人たちとリース契約を結び、得たカネで莫大な借金の一部を返済したのです。

長とする「ウィリアムとジョン」号に出資してバルバドスに向かわせました。1627年2月17日、この船は2年前に「オリープの花」号が着いたのと同じ地点に到達しました。ただ「オリープの花」号の時と違っていたのは、今回の乗組員およそ80人が入植者としてそのまま島にとどまったということでした（註）。彼らはこの島がイギリスの所有物だということを示すため、上陸地点を先代の国王、ジェームズ1世にちなんで「ジェームズタウン」と名付けました。これがのちのホールタウンです。

おさまらないのは、知らないうちにカーライル伯に島の利権をかすめ取られてしまったコーティーン卿です。不服を申し立てて、いろいろな方面から手を尽くしますが、あとの祭り。コーティーン卿には王室とのコネもなかったで結局泣き寝入りするハメになってしまいました。この経緯は島の歴史上、「バルバドス大盗難事件」と呼ばれています。

のちに述べることになるのですが、カーライル伯に安直に特許状を与えたチャールズ1世は、そのおよそ20年後、オリバー・クロムウェルによって首をとられてしまいます。そしてそのクロムウェルが、自分が治めるイギリスの言うことを聞かなくなった植民地バルバドスを討伐するため海軍艦隊を派遣することになるとは、その時だれが予想したでしょうか。

「悪代官」ハウリー

さて、まふまふバルバドスを篡奪したカーライル伯は、島を統治するために腹心のヘンリー・ハウリーという人物を新たな総督として送り込むことに成功します。1630年のことです。

このときのヘンリー・パウエルたちの入植がイギリス植民地としてのバルバドスの出発点となりました。ロンドンにいるコーティーン卿の意を受けて島の経営を任されたヘンリー・パウエルが、事実上バルバドスの初代植民地総督であると現在では考えられています。

植民地ビジネスのはじまり

パウエルに率いられた最初の入植者たちは、慣れない暑い気候や、水・食糧の不足、そしてマラリアに悩まされながらも、密林を切り開いて島の開拓を進めていきました。食糧になったのは、過去にポルトガルの船が残り繁殖していた野ブタや、当時オランダ領だった南アメリカ・ガイアナから移入したヤムイモ、キャッサバ、トウモロコシなどでした。彼らは島の西部から南部にむかって進んでいきました。

植民地ビジネスは初期投資をはじめから収益が回収できるようなものになるまでに時間がかかります。鉱物資源のないバルバドスで、入植者たちはヨーロッパへの輸出入農作物を栽培するために土地を開墾し農園を経営するよう

新総督ハウリーが、ボスであるカーライル伯に命じられたのは、タバコなどの輸出による収益をとにかく上げること、そして入植者たちからできるだけ多くの税を搾りとることでした。理由はいうまでもなく、ピンハネした利益をカーライル伯が借金返済にまわすためです。

もとはロンドンの織物商人だったハウリーは総督の任につくと、まるで強欲な殿さまに送り込まれた「悪代官」のように振る舞いはじめます。これまでにコーティーン卿の傘下にあった古参入植者たちへの迫害や税取り立ての容赦のなさは後世の語り草になるほどでした。

こんなハウリー総督の下で、もっとも辛酸をなめていたのは、当時、入植者社会の底辺にいた「年季奉公人」と呼ばれる人々でした。

白人年季奉公人の悲哀

昔のカリブのプランテーションの働き手という、アフリカから連れて来られた黒人奴隷を思い浮かべる人が多いかもしれませんが、けれどもバルバドスなどカリブ・イギリス植民地で黒人

奴隷が主要な労働力になるのは砂糖キビ栽培が本格化する17世紀半ば以降のこと、それ以前はヨーロッパ白人——たいがいイギリス出身——の「年季奉公人」たちが肉体労働の担い手でした。

年季奉公人の多くは本国での貧困から逃れるために雇い主と5〜7年程度の契約を結んで植民地に渡りプランテーション労働に従事した人たちでした。ほかに流刑者、逃亡犯罪人や、人買い業者に文字通り「誘拐」されてきた人などもおり、なかには子供も混じっていたということです。こういった人々の出身地はさまざまでしたが、プランテーション領主や役人など支配層が多かったイングランド出身者よりも、スコットランドやアイルランド、とりわけイングランドの従属的な立場におかれて貧しかったアイルランドの出身者が多かったといわれます^(註3)。

こういう事情でやって来た白人年季奉公人たちの境遇がどんなものであったことは想像にたくありません。別名「白い奴隷」とも呼ばれた彼らは、プランテーション領主から与えられる粗末な住居や食糧と引き替えに重労働に耐えなければなりませんでした。家内労働ならまだしも、カリブの炎天下

での畑仕事はつらい作業で、後年の黒人奴隷ほどではないにせよ、人権無視のひどい扱いを受けていたのです。ハウリー総督による入植者に対するきびしい税の取り立てのツケは、最終的にはプランテーションでこき使われる年季奉公人たちの肩にのしかかったのです。

1634年、こんな状況に耐えかねた年季奉公人たちによってバルバドス植民地はじめての蜂起が起きました。彼らが企てたのはプランテーション領主たちを襲ったあと、バルバドスに入港する最初の船を奪って故郷に逃げ帰ることだったのですが、ハウリー総督配下の800人の民兵集団にあっけなく鎮圧されてしまいました。

ハウリーの失脚

イギリス本国にいたカーライル伯は、ハウリー総督をつうじて、バルバドスから上がる儲けを搾れるだけ搾りとしていました。しかし悪いことは長続きしないもので、借金まみれのまま1636年に46歳で世を去ります。息子のカーライル伯2世がまだ若かったため管財人が島経営の面倒をみるこ

となりました。こうなると現地のハウリーはますますやりたい放題となります。カーライル伯2世や管財人のコントロールも効かなくなり、悪代官ぶりに拍車がかかってしまいました。しかし、あまりの横暴がロンドンの王宮まで伝わることで、結局1640年にハウリーは総督を解任され失脚してしまいました。およそ10年にわたって総督の職にあり、その悪政で住民を苦しめた彼は、バルバドス植民地史上、最悪の総督として歴史に名を残すこととなります。

ととなります。

ブリッジタウンの発祥

バルバドスの植民地化当初、島の中心地はヘンリー・パウエルたちが入植の起点にした西海岸のジェームズタウン

ン（のちホールタウン）でした。けれども開拓が進むにつれて、島民の活動の中心はもっと南にある大きな湾の周辺に移っていきます。

この湾に面し、島で最大の川（現在名…コンスティチューション・リバー）の河口にあった集落がしだいに島の首邑となって行政や商業の中心地として発展していきます。これが、こんにちのバルバドスの首都ブリッジタウンのはじまりです。湾の北端には港が築かれ、植民地時代には砂糖の積み出しや奴隷船の受け入れに使われていたのですが、現在ではカリブ海周遊の大型クルーズ船が何隻も停泊するブリッジタウン港となっています。

ブリッジタウンを擁するこの湾の名称は「カーライル湾」といいます。悪名高きハウリー総督の時代、彼のボスであったカーライル伯にちなんでこう呼ばれるようになったのです。

植民地になって間もないころの島にせつせと初期投資を行ったコーティーン卿から島の利権を横取りしたカーライル伯。現在、バルバドスの政治・経済・

●**註1** 「ウィリアムとジョン」号はイギリスからバルバドスに向かう航海の途中、大西洋上で（おそらくはポルトガルの）奴隷船を襲い、奪った約10人の黒人奴隷を乗せていたという説があります。これが本当だとすればバルバドスには植民地化当初から黒人奴隷がいたということになります。

●**註2** 海島綿（シーアイランド・コットン）は西インド諸島特産の綿花から作られる上質な綿で、ヨーロッパ人の到来以前から先住民によって栽培されていました。のちに砂糖キビが主要な産物になると、海島綿の栽培はしだいにすたれていきます。バルバドスでは現在も細々と海島綿の栽培が続けられていて、ごく少量の製品が高値でヨーロッパに輸出されています。筆者は島の加工場で製品化されたものを手に取って見たことがありますが、絹のような光沢と滑らかな手触りに驚いたおぼえがあります。

●**註3** こういう事情を背景に、かつてのバルバドスの白人社会では、イングランド系にくらべスコットランド系やアイルランド系の人たちを一段低く見る傾向が長期間にわたって残りました。たとえば、本稿（その1）冒頭で紹介したバルバドス・ヨットクラブでは、1924年の設立後しばらくの間、会員はイングランド系の富裕層ばかりで、（有色人種はもちろんのこと）年季奉公人を祖先にもつと見做されたスコットランド系、アイルランド系の人々が会員になることはできませんでした（2020年8月の同ヨットクラブ会報の記載による）。

●**註4** イギリス植民地のなかでバルバドスに先立って議会が設置されたのはバージニアとバミューダです。バルバドスでハウリー総督によって創設された議会は、幾多の変遷をへて現在のバルバドス国会下院につながっていきます。

（本稿は筆者の個人的な見解をまとめたものであり、筆者が属する組織の見解を示すものではありません。）

（第3部「ピューリタン革命とバルバドス」に続く）

観光そして安全保障の面でも最も重要なインフラを備えた湾の名称が、詐欺師まがいのこの成り上がり貴族の名を冠することとなったのは歴史の皮肉というものでしょうか。



バルバドス国会議事堂。現在の建物は1870年代に建てられました

令和 4 年度 (2022年度)

(令和4年7月1日～令和5年6月30日まで)

事業報告書

【簡略版】

※本誌では簡略版を掲載しています。
詳細につきましてはAPIC ホームページをご覧ください。

1. 太平洋島嶼国開発協力事業

(1) 太平洋諸国・大学生招待計画【延期】

毎年1月に太平洋諸国から数名の大学生を招待し、上智大学の短期プログラム January Session Japanese Studiesに参加させ、併せてAPICによる文化交流活動事業などを実施してきており、本年度も実施予定であったが、January Sessionがオンライン実施となったため、日本に対する理解を深めるには、やはり日本での対面授業が効果的であるという観点から、対面で予定されている2023年7月実施のSummer Sessionへ参加させることとし、次年度へ延期することとした。

なお、本事業は、日・カリブ友好協力事業の西インド諸島大学生招待計画と趣旨が同じであることから、一体の事業として実施しており、異なる地域の学生が一堂に会して学び、共に生活し、意見交換を図ることができるシナジー効果もあり、参加者からは貴重な経験ができたという評価を得ている。

(2) 太平洋諸国・記者招待計画【実施】

毎年10月頃に(公財)フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施しているもので、太平洋の記者を招待し、カリブ諸国・記者招待計画と一体の事業と

して、有力記者を招待して、我が国の環境保護、防災、エネルギー利用などについて理解を深めてもらい、我が国の現状についての広報をそれぞれの国で行ってもらうものである。プログラムコーディネーターとして、フロイド・タケウチ氏とドーン・マタス氏の2名にも本計画に参画してもらっている。本年度は、太平洋からは記者3名(フィジー、ソロモン諸島、サイパン)を招待した。

(3) 太平洋諸国・リーダー招待計画【延期】

COVID-19による渡航制限の解除が進まないことから、具体的な招待計画を策定することが難しく、次年度に延期することとし、今年度は実現出来なかった。

(4) 太平洋青年研修【延期】

サモア独立国とミクロネシア連邦チューク州より、将来を担う若手の実務者を我が国に招待し、自治体中心に研修を行う予定であったが、COVID-19の影響で具体的な招待計画の策定まで至らず、来年度以降に延期することとした。

(5) 太平洋環境セミナー【延期】

COVID-19の影響で渡航計画が立てられず、派遣する講師の予定も考慮して、次年度に延期することとした。

(6) APIC・MCT協力事業(上水道支援プロジェクト)【実施】

今年度はMCTから下記2件の要請があったため実施した。

①ミクロネシア連邦ポンペイ州キチ地区チャマロン村の配水管取り換え工事支援

チャマロン村は、近くにおおきな川が流れておらず、小さな湧き水が唯一の水源となっており、老朽化した金属製のパイプをPVCのパイプに交換するもの。この取り換え工事により、対象となった村(住民約800人)の各家庭に毎週少なくとも、1000ガロンの水を供給することができ、住民に対して、長期持続的に安全な水が提供することができ、MCTへ1・12万ドルを送付し、MCTに配水管の調達と取り換え工事を委託した。

②ジャマイカ

2023年6月17日に、在ジャマイカ日本国大使館・西インド諸島大学(UWI)の共催で実施された日本語スピーチコンテスト2023に、協賛というかたちで、コンテストの賞品として日本語の本や日本文化に親しんでもらえるグッズ支援を行った。当日は渥美恭弘在ジャマイカ日本大使、ウィリアムズ教育・青年大臣が出席したほか、60名ほどの観客があった。

3. 国際協力に関する講演事業

(1) APIC早期国際情勢講演会【継続】

令和4年度も外務事務次官、外務審議官、局長クラスの幹部を講師として招き、国際情勢、外交、経済に関する講演と意見交換会を会場とオンラインで実施した。

(2) 国際協力懇話会【継続】

3年振りとなる不定期開催、少人数を対象とした国際協力懇話会を国際文化会館にて3回実施した。また、2022年10月3日、地方開催として島根県隠岐郡海士町隠岐國学習センターにて島根県立隠岐島前高校の生徒などを対象に「第3回国際講座夢ゼミ」を開催、APIC理事の村上洋(元東レ株式会社取締役を講師として実施した。本講座は、2019年10月に海士町と締結した連携協定の事業の一環としてのものである。

4. 留学生奨学金事業【継続】

ザビエル高校(ミクロネシア連邦チューク州)は、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ、マーシャル諸島の最優秀の生徒が入学する高校で、エズス会が運営。APICは上智大学と協力して本「留学生制度」を開始。

当該留学生協定に基づき、2014年から留学生の支援を開始、既に6名の卒業生を出し、現在1名の学生が在籍している。2023年9月にはミクロネシア連邦ポンペイ州とパラオ共和国からそれぞれ1名の留学生が入学予定である。APICとしては今後も募金活動を積極化するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学の支援を行っていく。(なお、APICは旅費、生活費を負担、上智大学は学費、寮費を負担。)

②ミクロネシア連邦チューク州オネイ地区 貯水タンク設置事業

チューク州のオネイ島には、8つの村があり、住民838人が住んでいるが、飲料水を雨水に依存しているため、貯水タンクを設置して安定的な水の確保を図ろうとするもの。1000ガロンの貯水タンクを各村に設置(計8基)するもので、州都のチュークでタンクを調達して、住民がオネイに搬送、設置しようとするもの。全体で、2万ドルの要請があったが、上記①と合わせて本年度予算計上の範囲内での支援を行うこととし、今年度で1万ドルの支援、来年度で残りの1万ドルを支援することとした。

上記と同様に、MCTへ1万ドルを送金し、MCTが貯水タンクを調達して、現地に搬送し、住民の参加を得ながら設置する予定。

(7) APICとMCTとの協力事業(大学院生支援)【実施】

APICはミクロネシア自然保護基金(Mikronesia Conservation Trust:以下MCT)との連携協定に基づき、MCTの推薦により毎年ミクロネシア3カ国から留学生1・2名を受入れ、上智大学大学院地球環境学研究所で修士号を取得させるプログラム。長期的観点から環境関連に携わる人材の育成支援を目的としており、2017年のプログラム開始以降、既に7名が卒業、現在では3名の学生がそれぞれのテーマを持ちながら、研究を行っている。2023年9月に2名が卒業し、1名が入学予定となっている。

(8) 上智大学 Island Sustainability 研究所との共同事業【一部実施】

上智大学が、2022年央に島嶼部や島嶼国が良質な発展を遂げられるスキームの創成を目指す国内外を対象としたシンクタンク機能を有するIsland Sustainability研究所を設立した。この研究所の活動にあたり、国際機関、政府関係機関、国内外企業、法人、国外の著名連携大学によるコンソーシアムを形成することを企図しており、APICもこれまでに、同計画を支援する予定で、今年度は、太平洋島嶼国からのゲストを呼んで島根県海士町で開催するシンポジウムの検討のため、事前観察を実施した。

(9) ナンマトル遺跡保存支援事業【予備費実施】

ユネスコ世界遺産に登録されたFSMポンペイ島のナンマトル遺跡について、外務省の草の根無償によるデジタルセンターの建設の起工式が2020年5月24日に行われ、建設完了後に案内板の設置について支援を行う予定であったが、デジタルセンターの建設工事が、長引いたため、案内板の製作・設置もずれ込み、令和3年度決算後に完成し、設置費用について着手のための頭金(半額)を令和3年度の前払金として計上し、令和4年度に支払った残金を含めて、全額を本年度に計上した。

2. 日・カリブ友好協力事業

(1) 西インド諸島大学・大学生招待計画【延期】

毎年1月に西インド諸島大学(UWI)の学生を太平洋諸国の大学生と同時に招待しているが、太平洋事業同様、延期することとした。(内容は太平洋事業(1)参照。)

(2) カリブ諸国・記者招待計画【実施】

毎年10月頃に(公財)フォーリン・プレスセンターの協力を得て実施している。本年は、カリブの記者2名(ジャマイカ、バルバドス)を招待し太平洋諸国・記者招待計画と一体の事業として実施した。(内容は、太平洋事業(2)参照。)

(3) カリブ諸国・リーダー招待計画【実施】

本年は、以下の2グループ、合計7名を招待した。

①ジャマイカ農業・漁業大臣(同行者2名)

2022年10月11日から17日にかけてジャマイカのバーネル・チャールズジュニア農業・漁業大臣を招待した。大臣には、農業・漁業省のダーモン・スペンス事務次官及び水産庁のガビン・ペラミール長官が同行した。駐日ジャマイカ大使も、すべての会合観察に同行した。

②バルバドス若手リーダー4名

2022年11月13日から21日にかけて、バルバドスの環境保護関係の政府高官、研究者、環境保護団体の責任者を招待した。参加者は、環境・国土美化省ブルーグリーン経済庁水産局長のジョイス・レスリー女史、西インド諸島大学ケープヒル校の資源管理・環境研究上席研究員兼シニア講師のパトリック

(2023 年 9 月 26 日現在)

APIC 役員名簿

◆ 役員

理事長	重家 俊範	(最終官職：外務省 駐大韓民国特命全権大使)
常務理事代行	側嶋 秀展 ※	(最終官職：外務省 駐ミクロネシア連邦特命全権大使)
理事	荒木 恵	一般財団法人国際協力推進協会 (APIC) 事務局長 (最終官職：財務省 国際局付派遣職員 (アジア開発銀行職員))
理事	今野 秀洋	一般財団法人貿易・産業協力振興財団 理事長 (最終官職：経済産業審議官)
理事	鳥飼 玖美子	立教大学 名誉教授
理事	村上 洋	元 東レ株式会社 取締役／元 味の素株式会社 監査役
理事	山本 達也	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監事	金成 憲道	元 ドイツ証券株式会社 取締役会長
監	吉川 英一	元 株式会社三菱 UFJ 銀行 副頭取

◆ 評議員

評議員	石堂 一成	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員	坂本 吉弘	一般財団法人安全保障貿易情報センター 顧問 (最終官職：通商産業審議官)
評議員	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長 (最終官職：環境省 事務次官)
評議員	島内 憲	元 駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	高原 明生	東京大学大学院 教授
評議員	廣野 良吉	成蹊大学 名誉教授
評議員	本多 義人	東神インターナショナル株式会社 名誉会長
評議員	蓑田 秀策 ※	一般財団法人 100 万人のクラシックライブ 代表理事

※ 2023 年 9 月 26 日に開催された定時評議員会および臨時理事会にて新たに就任

APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省幹部・大使による **APIC 早朝国際情勢講演会**を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。

詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場 所 The Okura Tokyo 会議場

時 間 午前 8:30 ～ 10:00（朝食付き）

お問い合わせ TEL: 03-5577-2900

EMAIL: apicinfo@apic.or.jp

令和 6 年 1 月 1 日 発行

■ 発行人 重家 俊範

■ 発行所 一般財団法人 国際協力推進協会（APIC）
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町 6-12 紀尾井町福田家ビル 3 階
TEL: 03-5577-2900 FAX: 03-5577-2901
URL: <http://www.apic.or.jp/>

■ 編 集 APIC 事務局
